

淡路市

# 大円道向遺跡

—(二)志筑川水系志筑川 広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 31(2019)年 3月

兵庫県教育委員会



## 例　言

- 1 本書は、淡路市中田に所在する大円道向遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(二)志筑川水系志筑川広域河川改修事業に伴うもので、淡路県民局洲本土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移  
(発掘作業)

確認調査	平成 27 年 11 月 25 日～26 日
	実施機関：兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課
試掘調査	平成 28 年 4 月 15 日
	実施機関：兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課
本発掘調査	平成 28 年 7 月 20 日～平成 28 年 9 月 8 日
	実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター
	工事請負：向内造園株式会社
- (出土品整理作業)

平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成 30 年 4 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 山田清朝と大本朋弥が担当した。なお、本文の執筆は、第 1 章・第 2 章を山田が、第 3 章・大 5 章を大本が、それぞれ行った。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 空中写真測量は、株式会社かんこうに委託し、実施した。
- 7 調査成果の測量は、電子基準点淡路一宮・和歌山・西淡を元に基準点を設置して実施した。  
座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第 V 系に属する。
- 8 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 9 遺物写真撮影は、株式会社地域文化研究所に依頼し、実施した。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々からの御指導・ご教示をいただいた。  
記して感謝する次第である。

伊藤宏幸（淡路市教育委員会）・浦上雅史・金田匡史（洲本市教育委員会）・定松佳重（南あわじ市教育委員会）・新田妃三光（淡路市教育委員会）

## 目 次

### 第1章 大円道向遺跡

　　第1節 地理的環境..... 1

　　第2節 歴史的環境..... 5

### 第2章 調査の経緯

　　第1節 調査の起因..... 9

　　第2節 確認調査..... 11

　　第3節 本発掘調査..... 13

　　第4節 整理作業..... 13

### 第3章 調査の成果

　　第1節 概 要..... 14

　　第2節 遺構と遺物..... 16

### 第4章 大円道向遺跡出土のサスカイト製石器の産地推定..... 45

### 第5章 まとめ

　　第1節 遺物..... 49

　　第2節 遺構..... 50

　　第3節 総括..... 50

報告書抄録..... 52

## 挿 図 目 次

第1図 淡路市の位置	1	第22図 SD01検出作業	25
第2図 淡路市の地理的環境	2	第23図 SD01上層土器出土状況	26
第3図 志筑平野の地形環境	3	第24図 SD01中層土器出土状況	27
第4図 調査位置図	4	第25図 SD01下層土器出土状況	28
第5図 主要周辺遺跡	6	第26図 SD02・SD03・SD04	29
第6図 竣工後の横入遺跡	9	第27図 SD02・SD03	30
第7図 事業計画図	10	第28図 SD04	30
第8図 確認調査状況	11	第29図 SD05	31
第9図 遺構確認状況(G1)	11	第30図 SD09	32
第10図 確認調査位置図	12	第31図 SR01	33
第11図 現地説明会	13	第32図 SX01	33
第12図 調査区の土層断面	14	第33図 SD07	35
第13図 平面図	15	第34図 出土土器(1)	36
第14図 SB01	16	第35図 出土土器(2)	37
第15図 SK01	19	第36図 出土土器(3)	38
第16図 SK04	20	第37図 出土土器(4)・出土石器	39
第17図 SK05	20	第38図 サヌカイト産地推定判別図(1)	47
第18図 遺構群1	21	第39図 サヌカイト産地推定判別図(2)	48
第19図 SK07	22	第40図 弥生土器	49
第20図 SK10・SK11・SK12	22	第41図 縄文時代の海岸線と周辺の弥生時代遺跡	51
第21図 SK02・SD01	24		

## 表 目 次

第1表 主要周辺遺跡	6	第5表 分析対象一覧	45
第2表 出土土器観察表(1)	40・41	第6表 原石採取地と判別群名称	46
第3表 出土土器観察表(2)	42・43	第7表 分析値および産地推定結果	46
第4表 出土石器一覧表	44		

## 卷 首 図 版 目 次

### 卷首図版1

調査地遠景 西上空から  
調査地遠景 東上空から  
調査地全景 南上空から

### 卷首図版2

調査地全景 南東上空から

調査地全景 南上空から

### 卷首図版3

出土土器  
出土サヌカイト製品・剥片等

## 写 真 図 版 目 次

### 写真図版1 遺構

全景 東から 全景 西から

### 写真図版2 遺構

俯瞰

### 写真図版3 遺構

SP09 土器出土状況 北から

SP15 土器出土状況 南から

SP14 断面 南から SP14 断面 南から

SK01 断面 北から

### 写真図版4 遺構

SK02 上面検出状況 南から

SK02 下層検出状況 南から

SK02 横断面 東から

### 写真図版5 遺構

SK03 横断面 西から

SK04 土器出土状況 南東から

SK05 横断面 北から

SK07 横断面 西から

SK06 横断面 南から

SK09 横断面 西から

### 写真図版6 遺構

SK11 横断面 北東から

SK12 横断面 北から

SD01 土器出土状況（上層） 西から

SD01 土器出土状況（中層） 北から

### 写真図版7 遺構

SD01 土器出土状況（中層） 北から

SD01 土器 21・22 出土状況 西から

SD03 土器出土状況 東から

SD03 横断面 北東から

### 写真図版8 遺構

SD04 横断面 西から

SD04 土器出土状況 西から

### 写真図版9 遺構

SD06 横断面 北東から

SD07 横断面 南から

SD08 横断面 東から

SD09 横断面 西から

SD10 横断面 北から

SD12 横断面 東から

### 写真図版10 遺物

SK01 出土土器（2）

SK02 出土土器（3・4）

SK04 出土土器（5）

SD01 出土土器（6・11）

### 写真図版11 遺物

SD01 出土土器（7～10・12）

### 写真図版12 遺物

SD01 出土土器（13～15・21・22）

### 写真図版13 遺物

SD01 出土土器（16・17）

SD03 出土土器（24・25）

SD04 出土土器（27） SD09 出土土器（29）

### 写真図版14 遺物

SD05 出土土器（28） SD09 出土土器（30）

SR01 出土土器（31・34）

### 写真図版15 遺物

SR01 出土土器（35・36）

SR01 出土土製品（38）

### 写真図版16 遺物

SP09 出土土器（40） SD07 出土土器（41）

包含層出土土器（42・43・46・47）

### 写真図版17 遺物

包含層出土土器（48～50）

SD01 出土石器（S 1・S 6）

SK02 出土石器（S 2）

包含層出土石器（S 3～S 5）

巻首図版 1



調査地遠景 西上空から



調査地遠景 東上空から

巻首図版 2



調査地全景 南東上空から



調査地全景 南上空から

卷首図版3



出土土器



出土サヌカイト製品・剥片等



# 第1章 大円道向遺跡

## 第1節 地理的環境

### 1. 遺跡の位置

大円道向遺跡は、兵庫県淡路市中田に位置する。淡路市は、淡路島の北部に位置し（第1図）、2005年4月1日に、淡路町・北淡町・東浦町・津名町・一宮町の5町が合併してできた市である。市域の南側は洲本市と接し、北側は明石海峡を挟んで神戸市・明石市と境をなしている。また西側は播磨灘に、東側は大阪湾に面している。市域の面積は184.21km<sup>2</sup>に及び、人口は約44000人（平成30年3月現在）である。

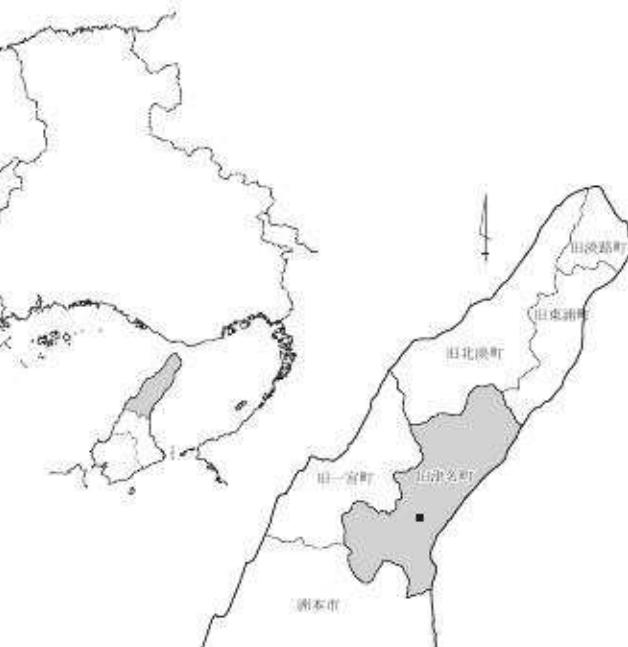
大円道向遺跡は、合併前の旧津名町に所在し、淡路市のなかでも南東部に位置する（第1図 ■）。淡路市域のなかでは最も面積が広く、その面積は55.21km<sup>2</sup>を測り、全体の約1/3を占めている。旧津名町の中心をなしていたのが志筑で、その西側に大円道向遺跡の所在する中田地区がある。平成16年7月1日における人口は16844人であった。

なお、旧津名町は志筑を中心に交通の要衝としても重要な位置を占めていたようである（第2図）。近世においては、志筑が淡路島の西浦を海沿いに延びるルートと、東浦を海沿いに延びるルートを東西に結ぶ官道の東側の結節点であった。<sup>(1)</sup>さらに、志筑平野の西側縁辺部に位置する志筑廃寺は、津としての機能が考えられており、少なくとも律令期以降、港としての機能を有していたものと考えられる。この結果、淡路島東海岸側においては、洲本に次ぐ規模の街となっている。

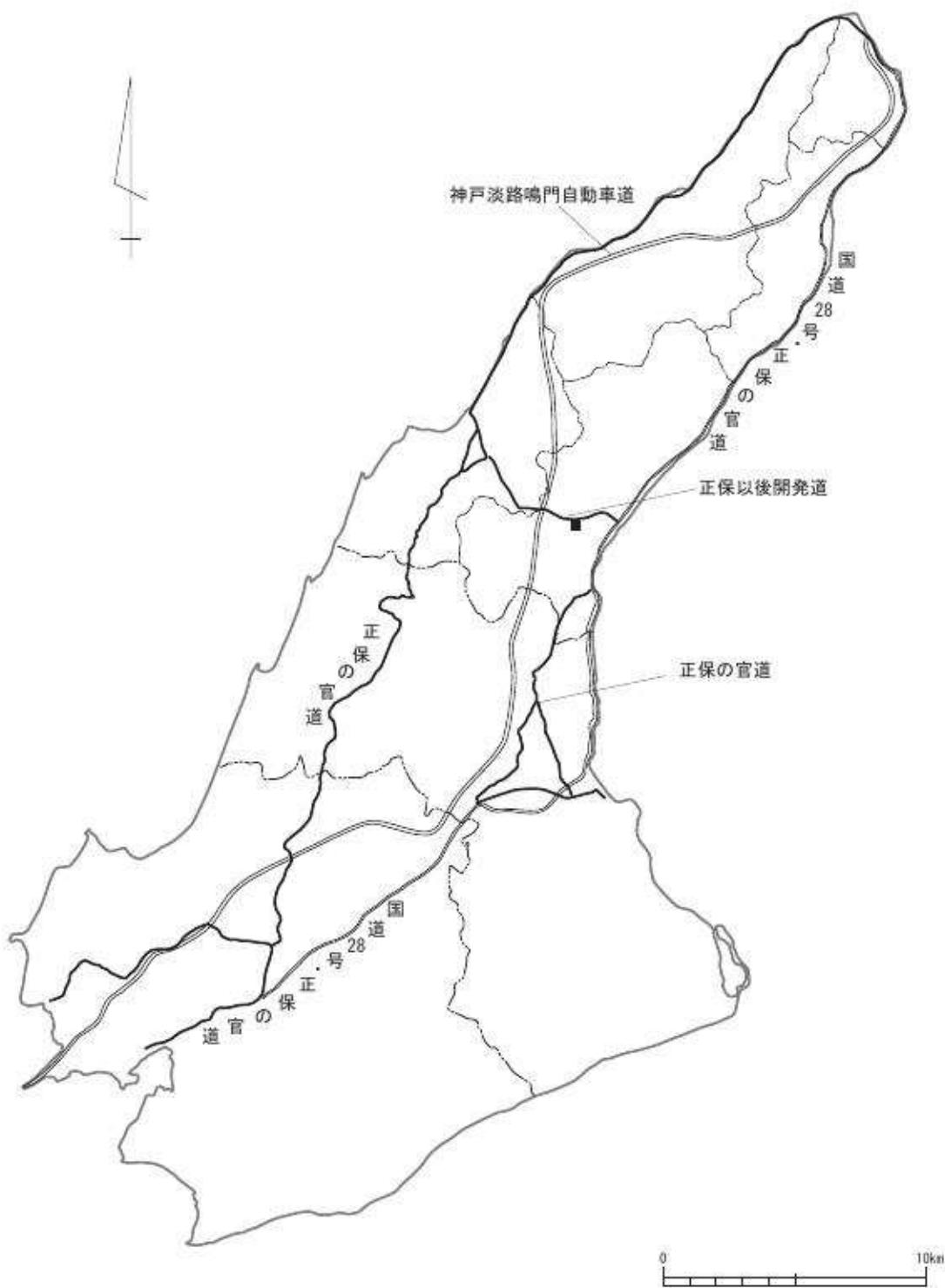
### 2. 地形的環境

淡路島の地形は、北部・中部・南部と大きく3地区に分けることができる。北部は花崗岩からなる山地が北東-南西方向にのび、その北西側は活断層があり、その断層崖の前縁には丘陵と段丘が分布している。中部は、大阪層群と花崗岩からなる先山（標高448m）を中心とした丘陵が発達している。南部は、中央構造線の北側に沿って和泉層群から構成される諭鶴羽山地が発達している。そして、淡路市の大半は北部の花崗岩帯からなるが、南部の一部が大阪層群となっている。両者の境は北西-南東方向にのびる志筑断層となっており、その南東側延長上に志筑平野が形成されている。旧津名町域のほとんどが上記の山地・丘陵からなり、平地はわずかである。そのわずかな平地の一つが志筑平野である（第3図）。

大円道向遺跡が所在する旧津名町は、この志筑平野を中心に形成されていた。志筑平野は、志筑川と宝珠川によって形成された小規模な平野である。その規模は、南北で0.5～1.0km、東西1.4kmである。



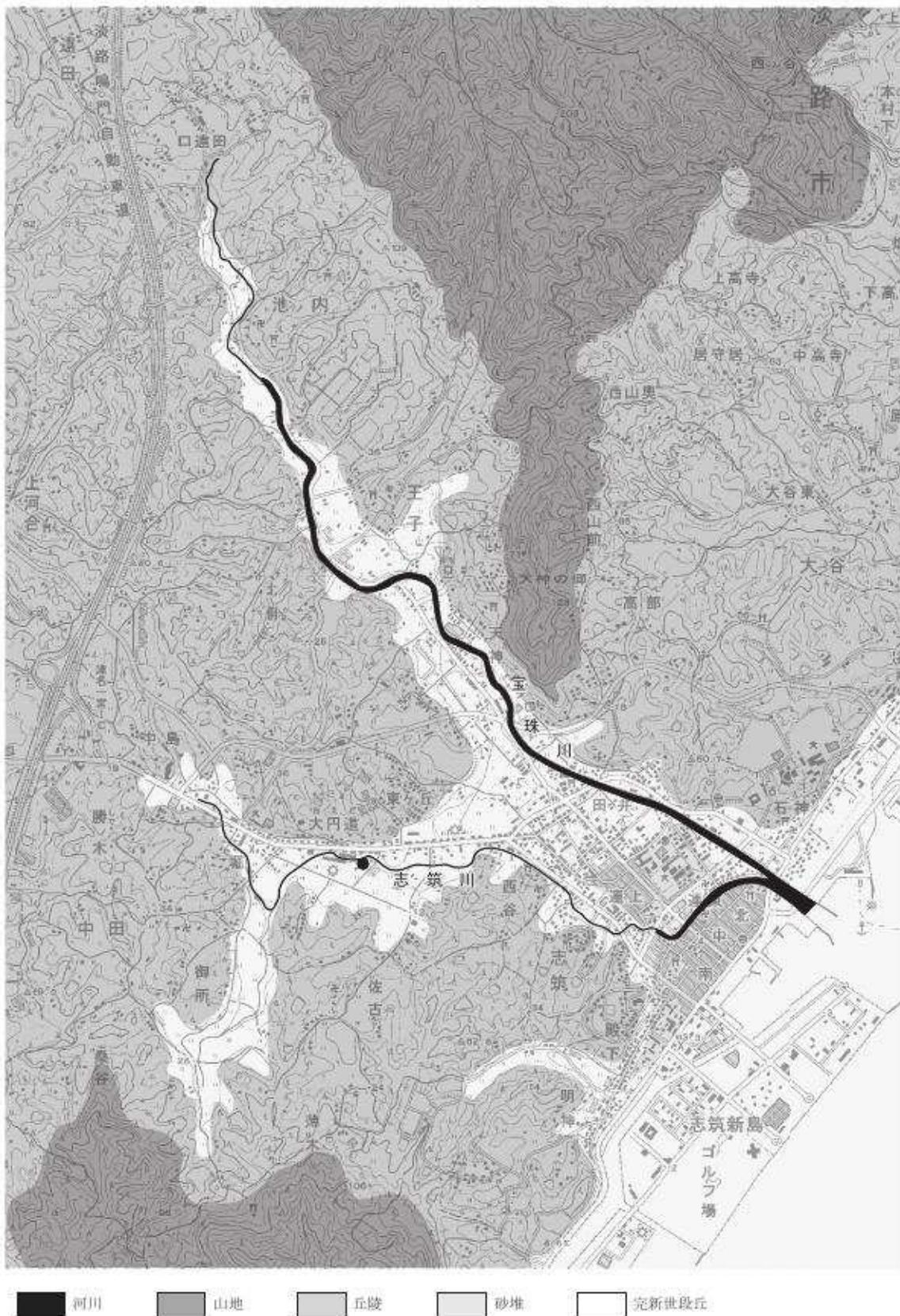
第1図 淡路市の位置



第2図 淡路市の地理的環境

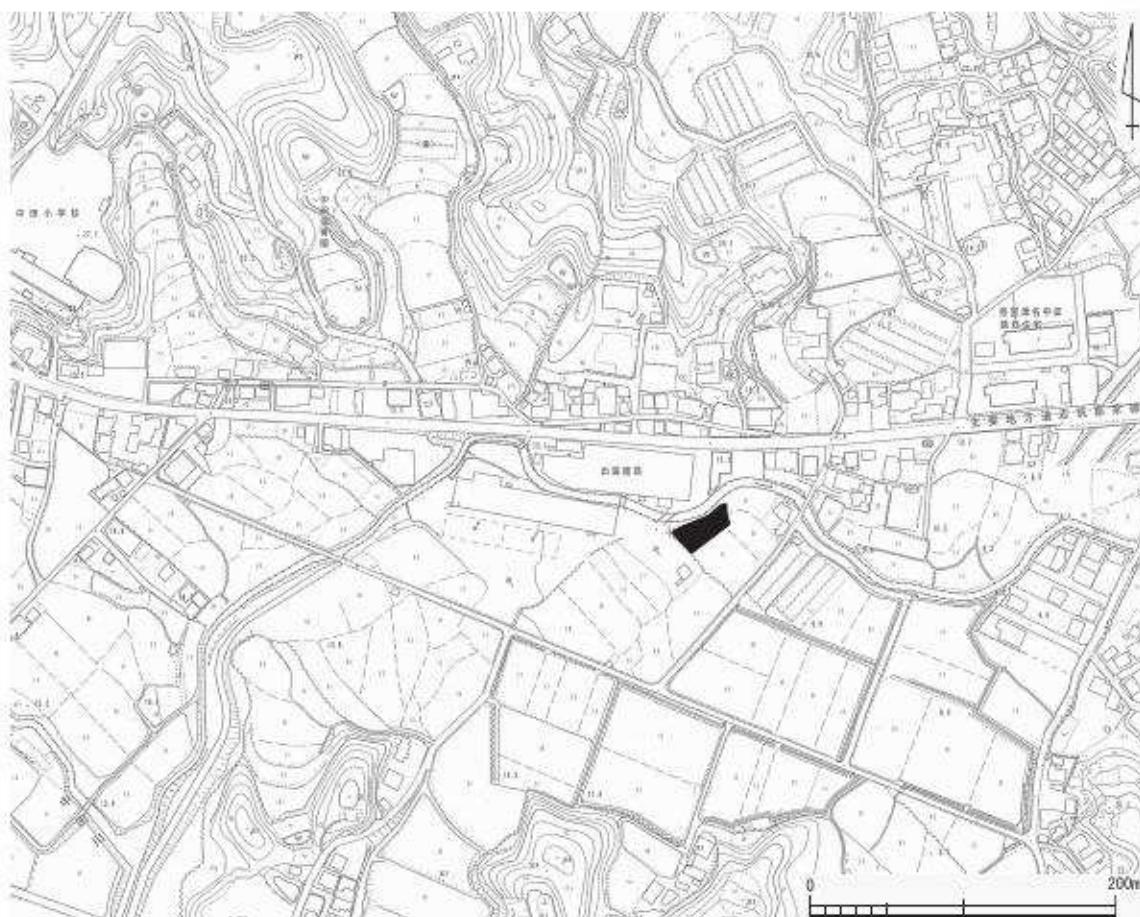
そして、この平野部の周囲を大阪層群からなる丘陵が取り囲んでいる。また、河口付近には砂堆が形成されている（第3図）。

宝珠川は淡路市遠田を源とし志筑平野の北縁を流れ、志筑川は淡路市中田の丘陵地を源とし志筑平野の南縁を流れ、河口付近で合流し、大阪湾へ注いでいる。また、各河川の上流域は、狭小な谷底平野が形成されている。河川延長は、宝珠川が4.3km、志筑川が2.9kmである。そして志筑川の流域面積は10.6km<sup>2</sup>である。



第3図 志筑平野の地形環境

大円道向遺跡は、志筑川中流域に位置し、宝珠川との合流地点から約2km遡った地点にある。志筑川右岸に位置し、完新世段丘面上に立地している。ただし、調査地の北側一部は志筑川の氾濫原面に



第4図 調査位置図

あたり、調査においてもその一部が検出されている。調査地の現地表面の標高は 10.40m で、志筑川河床との比高は約 1.60m である。

#### 〔参考文献〕

- (1) 兵庫県教育委員会『淡路往還（南海道）』歴史の道調査報告 第六集 1996
- (2) 伊藤宏幸『志筑廃寺発掘調査報告 I - 国庫補助事業 志筑廃寺範囲確認調査報告書 -』津名町教育委員会 2004
- (3) 兵庫県土地質図編纂委員会『兵庫の地質 - 兵庫県地質図解説書・地質編一』2003
- (4) 青木哲哉「横入遺跡と田井 A 遺跡の地形環境」『田井 A 遺跡 - (二) 志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』兵庫県教育委員会 2015

## 第2節 歴史的環境

### 1. はじめに

当節では、大円道向遺跡が所在する志筑平野を中心に概観する。特に、調査が行われた遺跡を中心に扱うこととする。当該地において周知されている遺跡のなかで、最も古く遡る時期は縄文時代である。そこで、縄文時代の遺跡から順に概観していくことにする。

### 2. 主要周辺遺跡

#### (1) 縄文時代

当該期の遺跡として周知されているのは、老谷遺跡(2)に限られる。ただし、包含層が確認されているのみで、当該遺跡の詳細については不明である。<sup>(1)</sup>

この他、田井A遺跡の旧河道内から、深鉢の小片が1点出土している。<sup>(2)</sup>

#### (2) 弥生時代

大円道向遺跡をはじめとして、古城江A遺跡(3)・古城江B遺跡(4)・権太夫原遺跡(6)・休場遺跡(7)・佐古遺跡(8)・横入遺跡(11)・田井A遺跡(13)・天神遺跡(15)・船橋遺跡(21)が周知されている。

このなかで、横入遺跡(11)・田井A遺跡(13)・天神遺跡(15)の3遺跡において調査が行われている。

横入遺跡では、前期まで遡る旧河道と中期の環濠が検出されている。<sup>(3)</sup> 旧河道内からは杭列が検出されている。このほか、前期末から中期にかけての大畦畔を伴う水田跡が検出されている。<sup>(4)</sup>

田井A遺跡および志筑廃寺の調査では、明確な遺構は検出されなかったが、前期の土器が出土している。<sup>(5)</sup> 特に、志筑廃寺は、大円道向遺跡とは約400mの距離にあり、本遺跡との関連で注目される。

天神遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・溝などの遺構が調査で明らかとなっている。<sup>(6)</sup> 前期末から中期中葉にかけての土器が多量に出土していることから、上記遺構はこれらの時期幅を持つものと考えられている。当該期の集落の実態が明らかとなった数少ない遺跡として、また大円道向遺跡と時期的に重なることからも注目される。

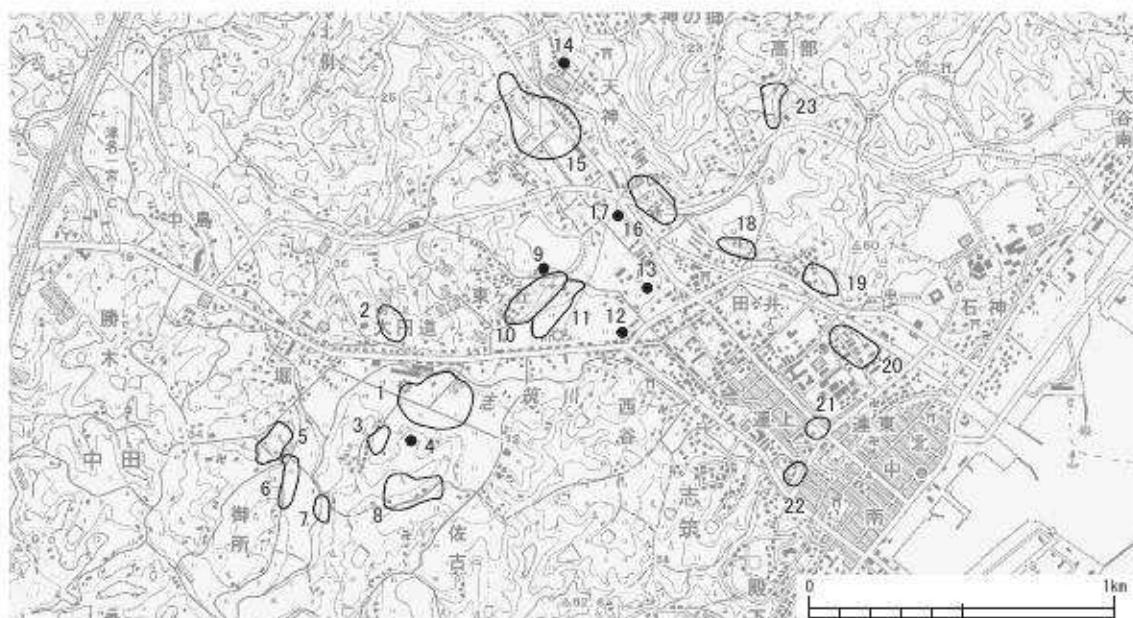
このほか、船橋遺跡(21)において試掘調査が行われ、流路状の落ち込み内から弥生土器の出土が確認されている。さらに、弥生後期の甕の底部片も出土している。<sup>(7)</sup> この調査成果から、船橋遺跡が立地する砂堆が弥生時代以前に形成されたものであることが明らかとなっている。志筑平野の形成過程を理解するうえで貴重な成果である。

また、大円道向遺跡の南西部の丘陵上に立地する古城江A遺跡(3)では弥生後期の土器の、古城江B遺跡(4)と休場遺跡(7)では弥生土器の、佐古遺跡(8)では弥生土器とサスカイトの、それぞれ散布が確認されている。<sup>(8)</sup>

以上が、当地の弥生時代の遺跡であるが、船橋遺跡を除いては、いずれも完新世段丘面上に立地している(第3図)点が、共通した特徴である。

#### (3) 古墳時代

横入遺跡(11)・池尻遺跡(12)・天神遺跡(15)・田井B遺跡(17)・柳原遺跡(20)が周知されている。このなかで調査が行われているのは、横入遺跡(11)・田井A遺跡(13)・天神遺跡(15)の3遺跡である。



第5図 主要周辺遺跡

第1表 主要周辺遺跡

遺跡名	遺跡番号	所在地	時代
1 大円道向遺跡	880131	淡路市中田	弥生時代・中世
2 老谷遺跡	880130	淡路市中田	縄文時代・中世
3 古城江A遺跡	880133	淡路市中田	弥生時代
4 古城江B遺跡	880132	淡路市中田	弥生時代・中世
5 高場遺跡	880134	淡路市中田	奈良時代・平安時代・中世
6 権太夫原遺跡	880146	淡路市中田	弥生時代・中世
7 休場遺跡	880136	淡路市中田	弥生時代
8 佐古遺跡	880135	淡路市中田	弥生時代・中世
9 臨池庵池遺跡	880015	淡路市志筑	奈良時代・平安時代・中世
10 志筑廃寺	880016	淡路市志筑・中田	弥生時代・奈良時代・平安時代・中世
11 横入遺跡	880129	淡路市志筑・中田	弥生時代・古墳時代・奈良時代
12 池尻遺跡	880128	淡路市志筑	古墳時代
13 田井A遺跡	880127	淡路市志筑	弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代
14 天神北遺跡	880031	淡路市志筑	平安時代・中世
15 天神遺跡	880125	淡路市志筑	弥生時代・古墳時代・中世
16 黒田西遺跡	880017	淡路市志筑	奈良時代・平安時代・中世
17 田井B遺跡	880126	淡路市志筑	古墳時代
18 黒田東遺跡	880113	淡路市志筑	奈良時代・平安時代・中世
19 脇遺跡	880104	淡路市志筑	奈良時代・平安時代・中世
20 柳原遺跡	880112	淡路市志筑	古墳時代・中世
21 船橋遺跡	880114	淡路市志筑	弥生時代
22 高松遺跡	880115	淡路市志筑	奈良時代・平安時代・中世
23 石畠遺跡	880039	淡路市志筑	平安時代・中世

横入遺跡では、中期の土坑と溝が検出されている。田井A遺跡では、飛鳥時代と考えられる水田跡が検出されている。水田跡は大畦畔と小畦畔からなり、これを覆う洪水砂層から、須恵器・土師器など当該期の土器が出土している。また、旧河道内からは、6世紀代まで遡る土器（須恵器）がまとまって出土している。

天神遺跡では、6世紀後半から末頃の掘立柱建物・溝・土坑などが検出されている。<sup>(18)</sup>特に建物については、掘立柱建物のみ18棟が明らかとなっており、当該地域の中核となる集落として注目される。

この他、池尻遺跡(12)では古墳時代の須恵器と土師器の散布が、田井B遺跡(17)では須恵器(横瓶)<sup>(19)</sup>の出土が、それぞれ確認されている。

#### (4) 奈良時代～平安時代

高場遺跡(5)・臨池庵池遺跡(9)・志筑廃寺(10)・横入遺跡(11)・黒田西遺跡(16)・黒田東遺跡(18)・脇遺跡(19)・高松遺跡(22)が周知されている。このなかで調査が行われているのは、志筑廃寺(10)と横入遺跡(11)・脇遺跡(19)の3遺跡である。

横入遺跡は志筑廃寺の東側の低地に隣接する遺跡で、志筑廃寺に伴うと考えられる須恵器・土師器・瓦が出土している。ただし、当該期の明確な遺構は検出されていない。

田井A遺跡では、奈良時代から平安時代後期にかけての、水田跡・旧河道・溝・掘立柱建物跡が検出されている。まず、8世紀前半・8世紀後半～9世紀・9世紀の3面にわたり水田跡が検出されている。次に9世紀と10世紀の2時期にわたる溝が検出されている。また、旧河道は、奈良時代～平安時代初頭と考えられ、多量の土器と木製品が出土している。なかでも、木製品については、出拳関連の木簡と祭祀遺物(人形・斎串・船形)の出土が注目される。最後に、平安時代後期には、掘立柱建物・土坑・溝が検出されている。

志筑廃寺は、横入遺跡西側の丘陵上に立地する遺跡である。<sup>(20)</sup>9次に及ぶ調査が行われている。遺構が地震により大きく壊れていることが明らかとなったが、瓦葺堂宇の存在が明らかとなっている。伽藍配置としては、金堂一堂が想定されている。また、堂宇に葺かれていた創建期の瓦が藤原宮所用瓦との同范関係が明らかとなっている。そして、出土瓦から、淡路島最古の寺院跡であることが明らかとなっている。さらに、小型の風鐸の可能性のある銅製品の出土も注目される。

脇遺跡では、3次におよぶ調査が行われている。平安時代から中世にかけての遺構面が4面確認され、柱穴・溝・土坑が検出されている。また、遺構は明らかとはならなかったが、8世紀代の須恵器も包含層から出土している。

このほか、黒田西遺跡(16)と黒田東遺跡(18)では奈良時代の須恵器と土師器が、高松遺跡(22)<sup>(21)</sup>では包含層が、それぞれ確認されている。

#### (5) 中世

大円道向遺跡(1)・老谷遺跡(2)・吉城江B遺跡(4)・高場遺跡(5)・椎太夫原遺跡(6)・佐古遺跡(8)・臨池庵池遺跡(9)・志筑廃寺(10)・田井A遺跡(13)・天神北遺跡(14)・天神遺跡(15)・黒田西遺跡(16)・黒田東遺跡(18)・脇遺跡(19)・柳原遺跡(20)・高松遺跡(22)・石畠遺跡(23)が周知されている。

このなかで調査が行われたのは、志筑廃寺(10)・田井A遺跡(13)・天神遺跡(15)である。

志筑廃寺では、鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・水溜状遺構等が検出されている。志筑廃寺以後の土地利用として注目される。

田井A遺跡では、当該期の土器(須恵器・瓦器・土師器)が出土しているが、遺構は検出されていない。

また、臨池庵池遺跡(9)では須恵器・土師器・瓦器の散布が、天神北遺跡(14)では遺物包含層と柱穴が、黒田西遺跡(16)と黒田東遺跡(18)では中世の須恵器・土師器の散布が、柳原遺跡(20)では須恵器と土師器の出土が、高松遺跡(22)では包含層が、それぞれ確認されている。<sup>(22)</sup>

〔参考文献〕

- (1) 久保弘幸『田井 A 遺跡－(二)志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』  
兵庫県教育委員会 2015 以後、田井 A 遺跡については本報告による。
- (2) 前掲 (1)
- (3) 渡辺 昇『横入遺跡－(二)志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』  
兵庫県教育委員会 2014 以後、横入遺跡については本報告による。
- (4) 伊藤宏幸『志筑廃寺発掘調査報告Ⅱ－国庫補助事業 志筑廃寺範囲確認調査報告書－』淡路市教育委員会 2008
- (5) 伊藤宏幸「天神遺跡－第2次調査－」「津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ 平成10年度 埋蔵文化財調査」津名郡町村会 2000
- (6) 足立敬介「志筑地区(津名町)」「津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 平成7～9年度 埋蔵文化財調査」津名郡町村会 1999
- (7) 津名町教育委員会『津名町遺跡分布地図－町内遺跡詳細分布調査報告書－』1997
- (8) 伊藤宏幸『天神遺跡 発掘調査報告書 古墳時代編－阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う発掘調査－』淡路市教育委員会 2015
- (9) 前掲 (7)
- (10) 伊藤宏幸『志筑廃寺発掘調査報告Ⅰ－国庫補助事業 志筑廃寺範囲確認調査報告書－』津名町教育委員会 2004  
伊藤宏幸『志筑廃寺発掘調査報告Ⅱ－国庫補助事業 志筑廃寺範囲確認調査報告書－』淡路市教育委員会 2008  
以後、志筑廃寺については両報告による。
- (11) 伊藤宏幸「脇遺跡－第1次調査－」「津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 平成7～9年度 埋蔵文化財調査」津名郡町村会 1999  
足立敬介「脇遺跡－第2～3次調査－」「津名郡埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ 平成7～9年度 埋蔵文化財調査」津名郡町村会 1999
- (12) 前掲 (7)
- (13) 前掲 (7)

## 第2章 調査の経緯

### 第1節 調査の起因

#### 1. 志筑川水系床上浸水対策特別緊急事業

志筑川およびその支川である宝珠川からなる志筑川水系においては、昭和49年9月10日～17日の台風23・24号、昭和49年の七夕豪雨、平成15年8月9日の台風10号、平成16年9月29日の台風21号、同年10月20日の台風23号などにより、多くの床上・床下浸水の被害を受けている。特に、平成16年の23号台風は、今回調査を行った地区まで被害が及ぶものであった。

以上から、当該地域への治水対策として、兵庫県県土整備部洲本土木事務所は、(二)志筑川水系志筑川広域河川改修事業を実施することとなった(第7図)。

#### 2. 埋蔵文化財の調査

上記事業のうち、志筑川と宝珠川を結ぶ放水路の建設についてはすでに完成している(第6図)。なお、当該事業にあたり、事業地内には横入遺跡と田井A遺跡が周知されていた。横入遺跡については平成20年度から平成23年度にかけて、田井A遺跡については平成21年度から平成24年度にかけ、それぞれ調査が行われている。そして、両遺跡の調査成果についても、すでに調査報告書が刊行されている<sup>(1)</sup>。

今回報告する調査の起因となった事業は、志筑川上流域の河川改修である。上記放水路より上流側にあたり、中田地内の中道橋から下流側約300mの大円道橋までの範囲である。工事計画は、河川を付け替えるとともに蛇行を緩やかにし、河川幅を拡げるものである。

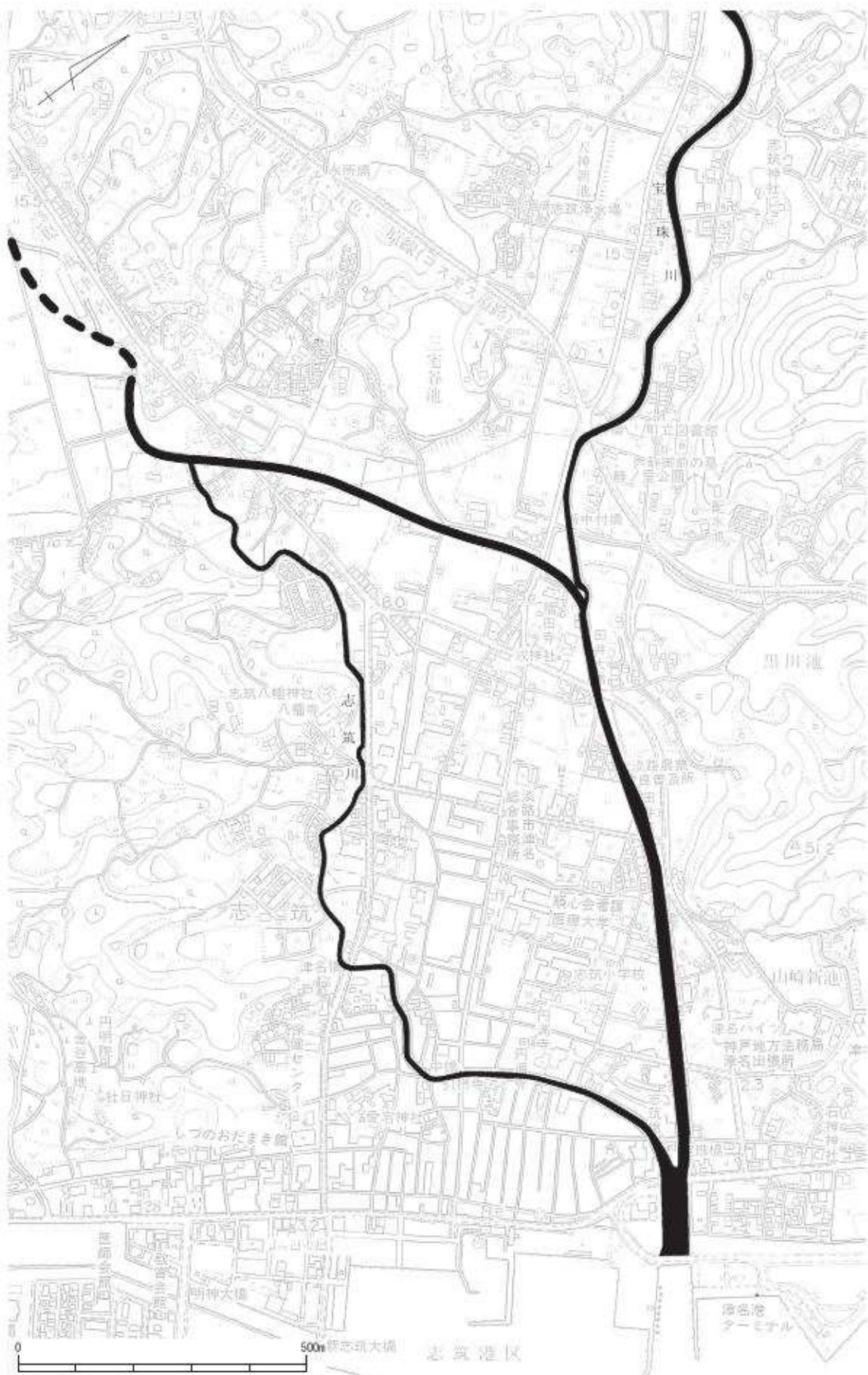
上記事業地内において、確認調査を行い、この結果を受け、埋蔵文化財が確認された地区を対象として本発掘調査が行われることとなった。なお、確認調査の詳細は次節で報告するとおりである。



第6図 竣工後の横入遺跡

#### 〔註〕

- (1) 渡辺 昇『横入遺跡－(二) 志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』  
兵庫県教育委員会 2014
- 久保弘幸『田井A遺跡－(二) 志筑川床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』  
兵庫県教育委員会 2015



第7図 事業計画図

## 第2節 確認調査

### 1. 調査の概要

確認調査は2次にわたり行われている（第10図）。各年度の調査内容・体制等は以下の通りである。

#### (1) 第1次

**調査番号** 2015126

**調査期間** 平成27年11月25日～26日

**調査面積** 36m<sup>2</sup>

**調査担当** 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課

池田征弘

**調査概要** 周知の大円道向遺跡の北縁およびその周辺を対象とした。2m×2mのグリッドを9箇所（G1～G9）に設定し、埋蔵文化財の有無を確認していった（第8図）。調査の結果、調査対象範囲の最東部のグリッドにおいて、柱穴や土坑などの遺構を確認するとともに（第9図）、土器の出土が認められた。他のグリッドにおいては、埋蔵文化財を確認することはできなかった。



第8図 確認調査状況



第9図 遺構確認状況（G1）

上田健太郎

#### (2) 第2次

**調査番号** 2016010

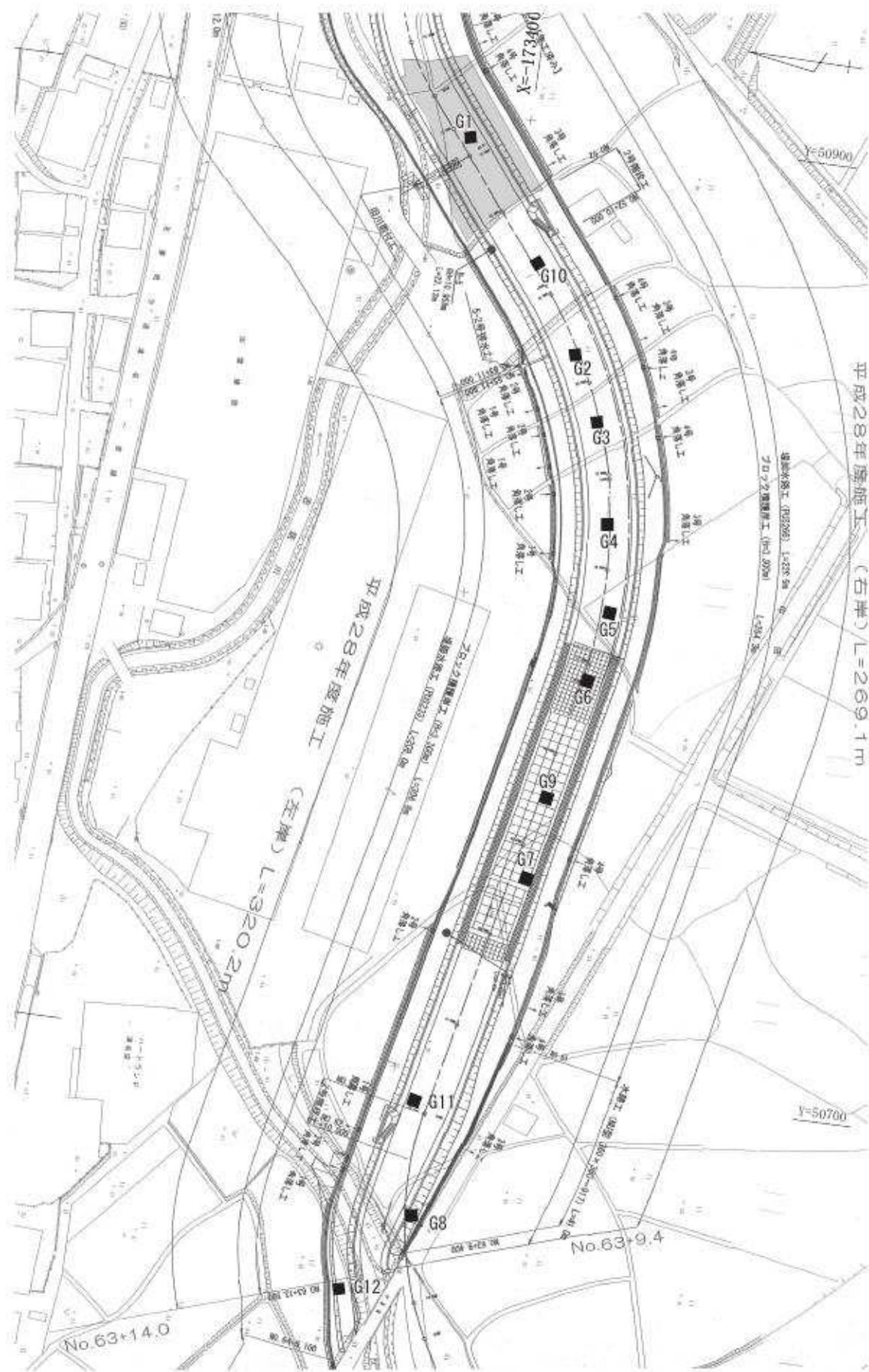
**調査期間** 平成28年4月15日

**調査面積** 12m<sup>2</sup>

**調査担当** 兵庫県立考古博物館埋蔵文化財課

### 2. 調査の結果

2次における調査の結果、調査対象地の東端部で埋蔵文化財の包含が明らかとなった。この地区（第10図：網掛け）が、今回報告する調査の対象地である。



第10図 確認調査位置図

### 第3節 本発掘調査

#### 1. はじめに

大円道向遺跡の調査は、確認調査の結果を受けてのものである。調査は平成28年度に行われている。

#### 2. 調査の概要

**調査番号** 2016041

**調査期間** 平成28年7月20日～9月8日

**調査面積** 570m<sup>2</sup>

**調査員** (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部調査課 山田清朝・大本朋弥

**調査概要** 確認調査で埋蔵文化財の包蔵が明らかとなっ

た範囲を調査対象とした(第10図 網掛け)。調査は、遺物包含層の上面までを機械により掘削し、以下を人力により進めていった。調査成果の図化については、8月25日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、この成果をもとに行った。なお、調査が一段落した8月28日には、一般県民を対象とした現地説明会を実施した(第11図)。当日は、約61名の参加が得られた。



第11図 現地説明会

### 第4節 整理作業

#### 1. はじめに

整理作業は、平成29年度と平成30年度の2箇年にわたり行われている。

#### 2. 整理作業の経過

##### (1) 平成29年度

**整理概要** 出土遺物の実測・写真撮影をおこなった。また、遺構図のレイアウト・トレースを行った。

**整理体制** (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 菊田淳子・深江英憲・大本朋弥

調査課 山田清朝

嘱託員 萩野麻衣・今村直子・門田諭佳・菅生真理子・沼田真奈美・小野潤子・中井翠・小林礼子・長井香苗・柏原美音・佐伯純子・前田陽子・古谷章子・尾鷲都美子・寺西梨紗・平宮可奈子

##### (2) 平成30年度

**整理概要** 遺物・遺構図のレイアウト・トレースを行った後、編集作業をおこなった。

**整理体制** (公財) 兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

整理保存課 菊田淳子・深江英憲・大本朋弥

調査課 山田清朝

嘱託員 柏原美音・古谷章子・宮田麻子・尾鷲都美子・寺西梨紗

## 第3章 調査の成果

### 第1節 概要

#### 1. 調査の概要

調査区は、志筑川右岸に位置する氾濫原～自然堤防上に立地する。東西 32～40 m、南北 20m の不整形台形を呈し、面積は 570m<sup>2</sup>である。

現地表は耕作地で標高 10.3 m～10.4 m、遺構検出面は標高 9.7 m～9.9 mである。調査の結果、調査区北側は現代の遺物を包含する志筑川旧流路によって大部分が削平されていたが、調査区南側で弥生時代の柱穴・土坑・溝状遺構・流路・落込みと、中世の柱穴・溝を検出した。

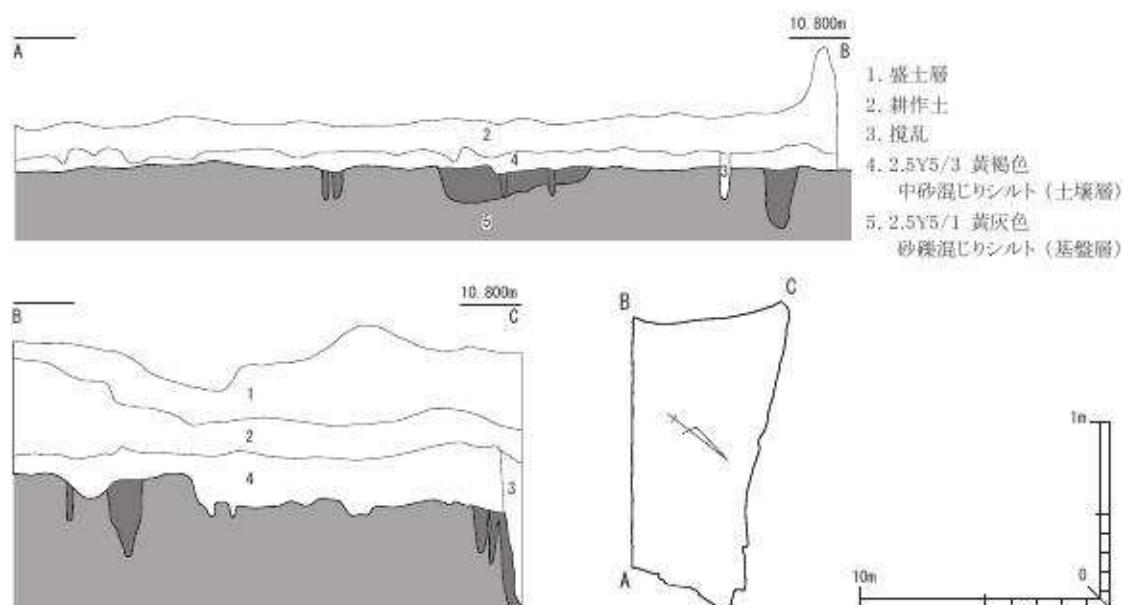
#### 2. 基本層序と遺構の検出

**基本層序** 上から盛土層・現代耕作土層・土壤層（包含層）・基盤層の順に堆積していた（第12図）。盛土層は隣接する工場の駐車場用兼ヤードとして造成されたもので、調査区西端の土地境界に隣接する箇所で採石が 30cm～50cm 盛られていた。調査区現地表の大部分は耕作土であり、調査区全体で層厚は 15cm～20cm を測る。なお、調査区南西端には水田畦畔が残存しており、この部分が駐車場盛土との境界となっている。

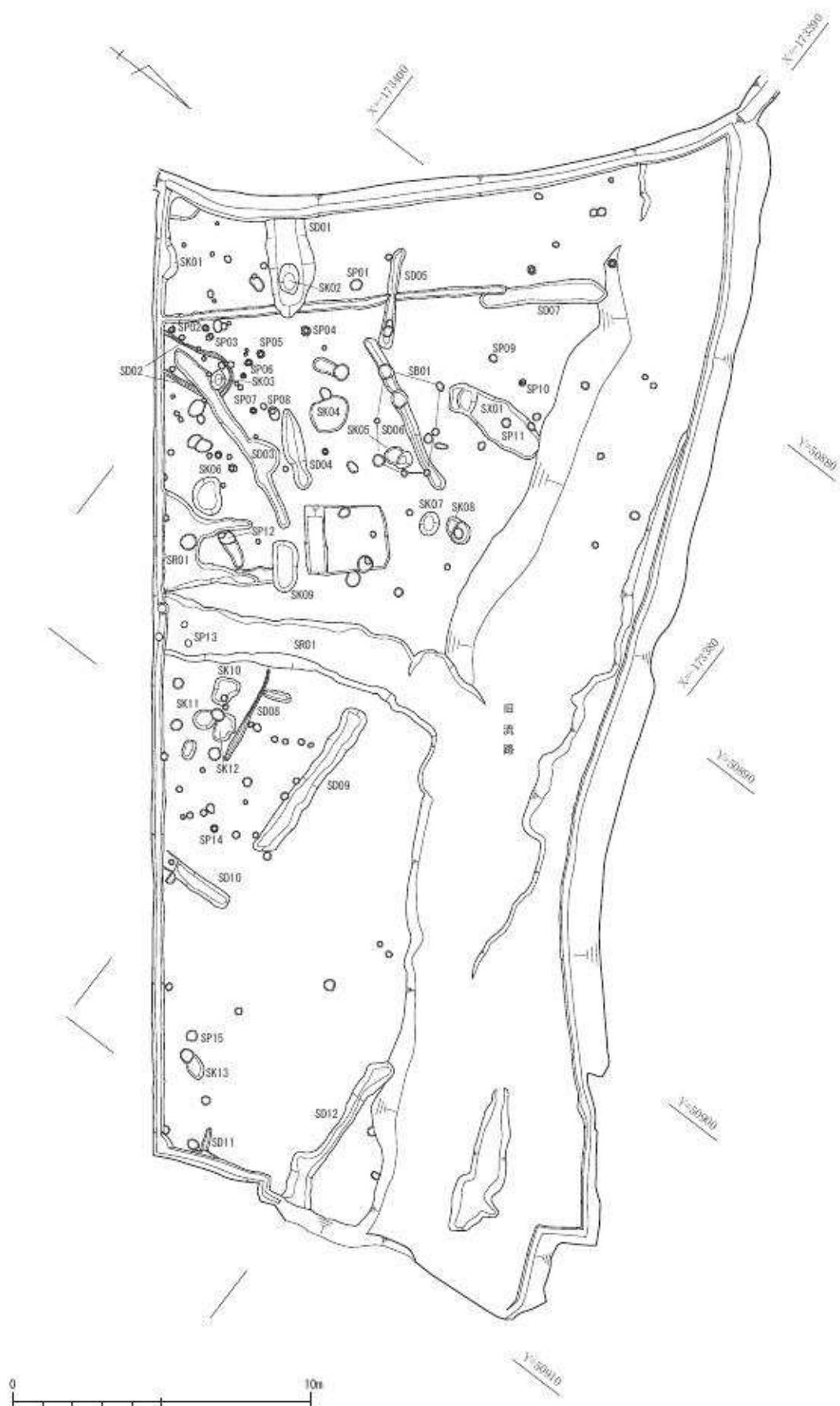
土壤層は現代耕作土層の直下で調査区全体に認められ、遺物包含層となっていた。層上部では耕作に伴う酸化鉄が沈着している。黄褐色中砂混じりシルトが主で、調査区南側では層厚 10cm 程度と薄いが、旧志筑川流路に向けて基盤層が低くなる北側では 20～30cm と厚く堆積していた。

基盤層は黄灰色細礫混じりシルトからなり、調査区北側に向けて低くなっている。部分的に同時異層の砂層が認められたことから、志筑川の活動によって形成された河成堆積物と考えられる。

**遺構検出** 遺構の検出は土壤層（第12図：第4層）を除去した面、すなわち基盤層直上で検出した。検出面は 1 面である。



第12図 調査区の土層断面



第13図 平面図

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 概要

**遺構の分布** 調査区北半では幅5～6mにわたり現代の流路跡を検出しており、調査区の南北で遺構密度に差が生じている（第13図）。この流路跡は調査区北側を流れる志筑川の現流路に平行し、調査区東端において拡幅する川幅とも一致する（写真図版1）。このことから、耕地利用を目的として埋め立てられた志筑川旧流路の一部によって調査区北半の遺構は大部分が削平されたと考えられる。実際に調査区南半で多数検出されている弥生時代及び中世の遺構の一部は旧流路によって削平されていることが確認できる。このため、南北での遺構の疎密は当時の分布状態を反映したものとはいえず、当初は調査区全体にわたって遺構が広がっていたものと考えられる。

**検出遺構** 弥生時代前期～中期の掘立柱建物跡・柱穴・土坑・溝・流路・落込み、中世の柱穴・溝を検出している（第13図）。弥生時代の遺構からは、量の多寡はあるものの時期を特定できる土器が出土している。この他に、遺構埋土の特徴によっても大まかな時期の推定が可能であった。すなわち、弥生時代の遺構埋土が暗褐色ないし黄灰色を呈する砂質シルトであるのに対し、中世の遺構埋土は灰白色のシルト質砂である。このため、遺構の帰属時期については出土遺物に加えて、埋土の特徴をもとに時期を判別している。

### 2. 弥生時代の遺構と遺物

#### (1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡1棟を検出している。

##### SB01

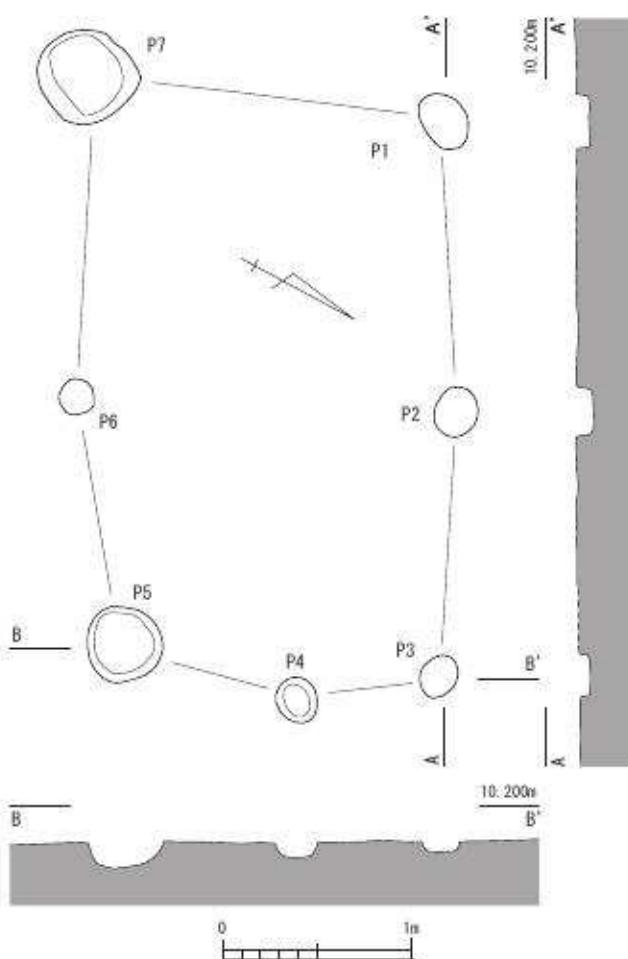
**概要** 調査区西側に位置する（第13図）。建物跡を構成する柱穴（P3・P7）がSD06と切合関係にあり、SD06を切っている。

**形状・規模** N59°Eに主軸を持つ、梁行2間・桁行2間の側柱建物である（第14図）。ただし、建物北梁行の柱穴1穴については検出できなかった。桁行の柱通りは比較的良好であるが、梁行は良好とはいえない。

桁行の柱間距離は1.6m～1.8m、梁行の柱間距離は1.0m程度である。柱穴は円形を基本とし、40cm程度の比較的大型のものと20cm程度の小型のものがある。また、各柱穴の検出面からの深さは6cm～15cmと浅いものが多い。

**出土遺物** P4・P5・P7から甕の胴部片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

**時期** 出土土器から弥生時代前中期～中期初頭に位置付けられる。



第14図 SB01

## (2) 柱穴

建物を構成する柱穴ではないが、時期を特定できる遺物が出土したものを中心報告する。

## SP01

**概 要** 調査区西部、SD01 の北、SD05 の南に位置する（第13図）。径38cmの円形であり、検出面からの深さは17cmを測る。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## SP02

**概 要** 調査区南西部、SD02 の西側に近接して位置する（第13図）。径22cmの円形であり、検出面からの深さは11cmを測る。

**出土遺物** 2条のヘラ描き沈線文を有する壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## SP03

**概 要** 調査区南西部、SD02 の西側に近接して位置する（第13図）。長径30cm、短径20cmの楕円形であり、検出面からの深さは22cmを測る。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## SP04

**概 要** 調査区南西部、SD01 の東側に近接して位置する（第13図）。径32cmの円形であり、検出面からの深さは22cmを測る。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## SP05

**概 要** 調査区南西部、SD01 の東側、SD02 の西側に位置する（第13図）。径28cmの円形であり、検出面からの深さは41cmを測る。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## SP06

**概 要** 調査区南西部、SD01 の東側、SD02 の西側に近接して位置する（第13図）。径26cmの円形であり、検出面からの深さは23cmを測る。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SP07**

**概 要** 調査区南西部、SD03 の北側、SD04 の南側に位置する（第13図）。径 22cmの円形であり、検出面からの深さは 18cmを測る。

**出土遺物** 壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SP08**

**概 要** 調査区南西部、SD03 の北側、SD04 の南側に位置する（第13図）。長径 49cm、短径 34cmの楕円形であり、検出面からの深さは 26cmを測る。

**出土遺物** 壺の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SP11**

**概 要** 調査区西部、SX01 と重複している（第13図）。SX01 と切合関係にあるが、SX01 完掘後に検出したため、前後関係は不明である。径 32cmの円形であり、検出面からの深さは 10cmを測る。

**出土遺物** 壺の底部片が出土しているが、図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SP12**

**概 要** 調査区中央南部、SK09 の南側、SR01 の間に位置する（第13図）。径約 32cmの不整円形であり、中世の柱穴に切られている。検出面からの深さは 11cmを測る。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SP14**

**概 要** 調査区中央南部、SD09 の南側、SD10 の西側に位置する（第13図）。径 22cmの円形であり、検出面からの深さは 8cmを測る。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SP15（写真図版3）**

**概 要** 調査区東部に位置する（第13図）。径 35cmの円形で、検出面からの深さは 6cmを測る。

**出土遺物** 弥生土器の壺の底部（1）が出土している（第34図）。外面はヘラによるナデ調整により仕上げられている。

**時 期** 弥生時代前期に位置付けられる。

## (3) 土坑

28基の土坑を検出している。このうち、時期を特定できる遺物が出土しているものを中心に報告する。

## SK01 (写真図版3)

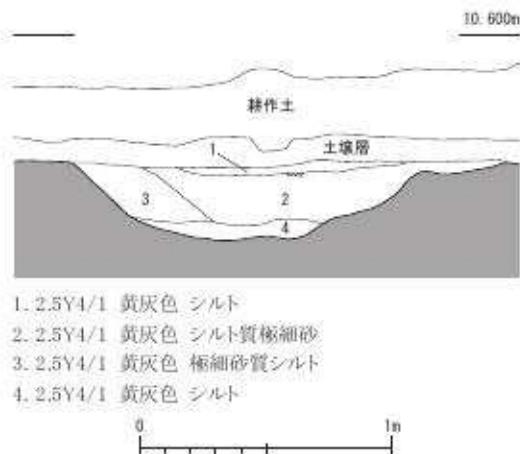
**概要** 調査区南西隅に位置し、側溝によって大部分が切られている。また、半分以上が調査区外に続いているため全形は不明である（第13図）。

**形状・規模** 平面形について、壁面にかかる部分で主軸をなし、長径124cmの梢円形となると考えられる。断面形は深さ28cmの緩やかな弧状をなす（第15図）。

**埋没状況** 上から、上面に酸化鉄がバンド状に沈着した黄灰色シルト、黄灰色シルト質極細砂、黄灰色極細砂質シルト、黄灰色シルトが堆積していた（第15図）。最下層は基盤層の下層に堆積する黒褐色シルトのブロックを含んでいる。以上の層相から人為的に埋め戻されたものと考えられる。

**出土遺物** 有文如意形口縁甕（2）が出土している（第34図）。口縁部～胴部にかけて残存しており、胴部上半には3条のヘラ描き沈線文が施されている。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。



第15図 SK01

## SK02 (写真図版4)

**概要** 調査区南西部、SD01内に位置している（第13図・第21図）。後述のSD01検出時には認識できなかったが、SD01埋土上層出土土器を取り上げた後、下層掘削中に検出した。出土土器片の一部がSD01より出土する土器の一部として接合関係にあることから、SD01を切って掘り込まれているものと考えられる。

**形状・規模** 平面形はN45°Eに主軸をもつ梢円形であり、長径103cm、短径67cmを測る。断面形は緩やかな弧状をなし、検出面からの深さは12cmを測る（第21図）。

**埋没状況** 上から灰色シルト混じり細砂、焼土、炭混り黒褐色土が堆積しており、低温で被熱した形跡がある。

**出土遺物** 有文如意形口縁甕（3・4）と石鏃（S 2）が出土している（第34図・第37図）。3は口縁部～胴部上半が残存しており、胴部上半に14条のヘラ描き沈線文が施されている。4は口縁部を屈曲成形する際につけたユビオサエ痕が頸部外面に明瞭に残る。口径と胴部最大径がほぼ等しく、胴部上半に2条のヘラ描き沈線文が施文されている。

S 2は凹基無茎式鏃であり、先端部が欠損している。基部の抉りは浅く、器長の1/5にも満たない。側縁は直線的に整形される。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## SK03 (写真図版5)

**概要** 調査区南西部、SD02とSD03に近接して位置している（第13図）。SD03と切合関係があり、SD03を切っている。

**形状・規模** N80° E に主軸をもち、平面形は長径 64cm、短径 54cm の梢円形である。断面形は緩やかな弧状を呈し、検出面からの深さは 14cm を測る。

**埋没状況** 黄灰色シルト質極細砂が堆積しており、層上部には酸化鉄・マンガンが多数沈着していた。層相から人為的に埋められたものと考えられる。

**出土遺物** 壺の底部片と甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

#### SK04 (写真図版5)

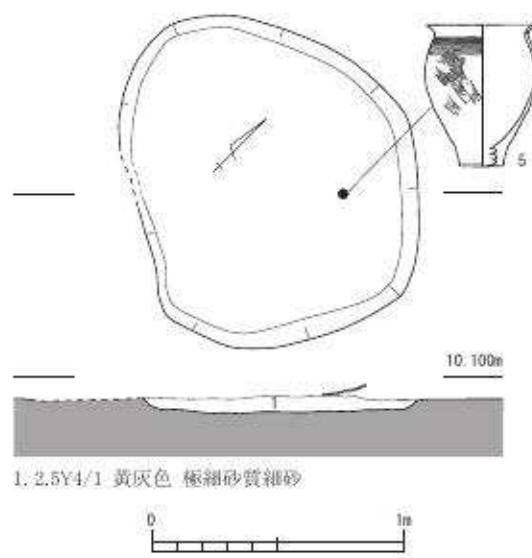
**概要** 調査区西半、SB01 の南西、SD04 の北に位置している（第13図）。

**形状・規模** N74° W に主軸を持ち、平面形は長径 130cm、短径 110cm の不整円形である（第16図）。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは 7cm を測る。

**埋没状況** 自然堆積による黄灰色極細砂質細砂が堆積しており、全体に酸化鉄、マンガンを多く含む。埋土上面からは土器片が出土している。

**出土遺物** 埋土上面より有文如意形口縁甕（5）が出土している（第34図）。磨滅が著しく内面の調整は不明だが、外面はハケ調整で仕上げられている。胴部上半に10条のヘラ描き沈線文が施される。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。



第16図 SK04

#### SK05 (写真図版5)

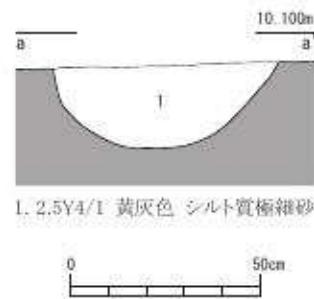
**概要** 調査区中央部、SD06 の南側、SB01 の平面プランに重複して位置しているが、SB01 との前後関係は明らかでない（第13図・第18図）。

**形状・規模** N22° W に主軸を持ち、平面形は長径 93cm、短径 61cm の梢円形を呈する。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは 22cm を測る。

**埋没状況** 黄灰色シルト質極細砂が堆積しており、層上部には酸化鉄・マンガンが多数沈着していた（第17図）。層相から人為的に埋められたものと考えられる。

**出土遺物** 甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時期** 出土土器の特徴から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。



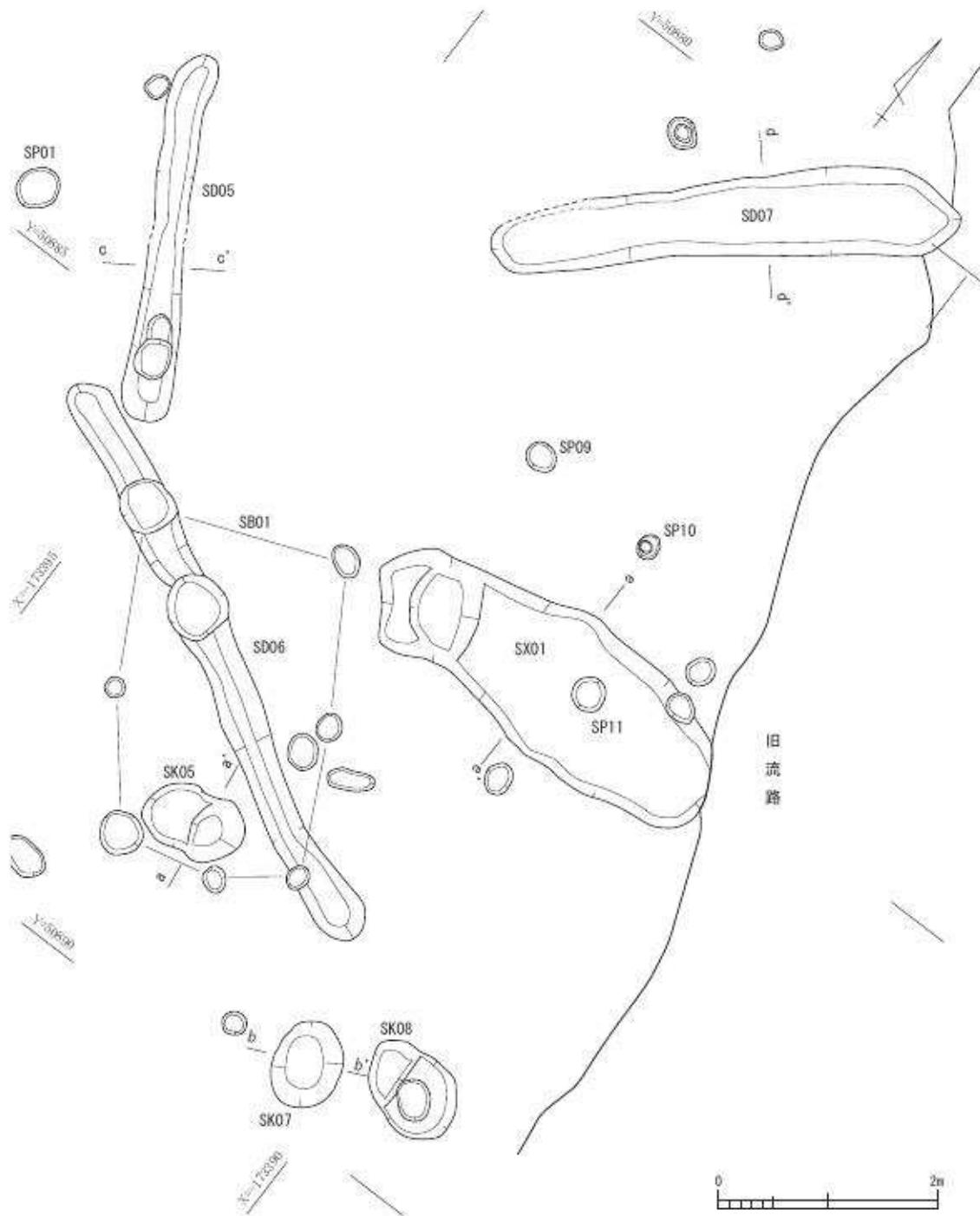
第17図 SK05

#### SK06 (写真図版5)

**概要** 調査区中央部、SD03 の南側、SR01 の西側に位置する（第13図）。

**形状・規模** N44° W に主軸を持ち、平面形は長径 120cm、短径 96cm の梢円形を呈する。断面形は緩い弧状を呈し、検出面からの深さは 20cm を測る。

**埋没状況** 黄灰色細礫混りシルト質極細砂が堆積している。全体に酸化鉄・マンガンが沈着しており、



第18図 遺構群1

粘性が弱い。層下部に基盤層のブロックを含んでおり、人為的に埋められたものと判断される。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

#### SK07 (写真図版5)

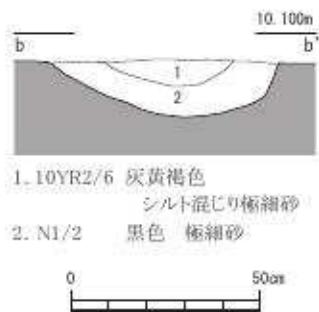
**概要** 調査区中央、SB01の北側、SK08の南東側に近接して位置する (第13図・第18図)。

**形状・規模** N65°Eに主軸を持ち、平面形は長径80cm、短径60cmの梢円形である。断面形は弧状で、検出面からの深さは15cmを測る。

**埋没状況** 上から灰黄褐色シルト混じり極細砂、黒色極細砂の2層が堆積していた(第19図)。下層には暗灰色極細砂がブロック状に混入していることから、人為的に埋められたものと考えられる。

**出土遺物** 壺及び甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。



第19図 SK07

#### SK08

**概要** 調査区中央部、SB01の北、SK07の東に近接して位置している(第13図・第18図)。

**形状・規模** N26°Eに主軸を持ち、平面形は長径103cm、短径71cmの橢円形である。断面形は浅い皿状を呈し、検出面からの深さは5cmを測る。

**埋没状況** 褐灰色シルト混じり極細砂が堆積していた。層相から人為的に埋められたものと判断される。

**出土遺物** 検出面より若干遊離しているが、甕の胴部片が出土している。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

#### SK09(写真図版5)

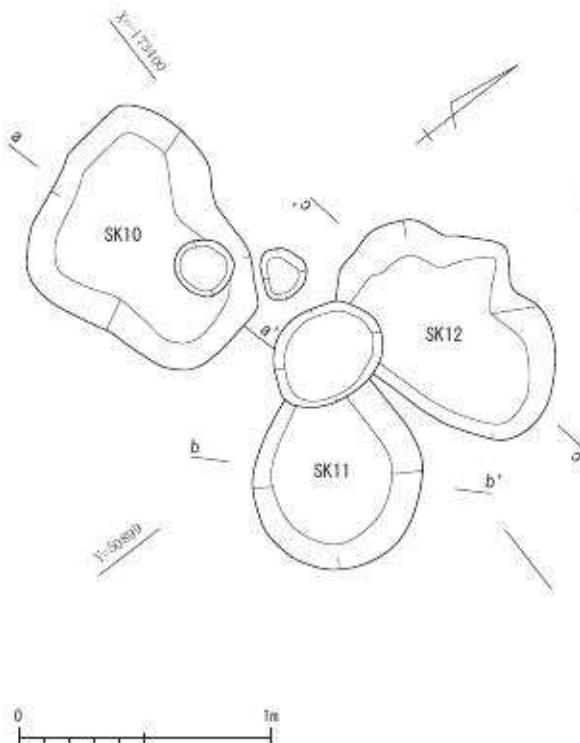
**概要** 調査区中央部に位置する(第13図)。SR01と切合関係にあり、SR01を切っている。

**形状・規模** N51°Eに主軸を持ち、平面形は長径174cm、短径80cmの橢円形を呈する。断面形は緩やかな弧状を呈し、検出面からの深さは12cmを測る。

**埋没状況** 自然堆積の褐灰色細砂混じりシルトが堆積していた。

**出土遺物** 甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

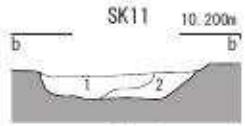
**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。



1. 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂～細砂

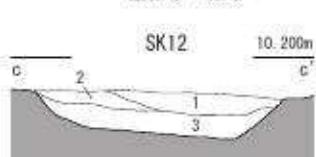
2. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質極細砂

3. 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂シルト



1. 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂～細砂

2. 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂～細砂



1. 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂～細砂

2. 2.5Y4/1 黄灰色 脂肪質極細砂

3. 2.5Y4/1 黄灰色 極細砂～細砂

第20図 SK10・SK11・SK12

**SK10**

**概 要** 調査区中央部、SR01の西側、SK11・SK12に近接して位置している（第13図・第20図）。弥生時代の柱穴に切られているが、SK11・SK12との前後関係は不明である。

**形状・規模** N74° Eに主軸を持ち、平面形は長径98cm、短径69cmの不整円形である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは17cmである。

**埋没状況** 上から基盤層のブロックを含んだ黄灰色極細砂～細砂、マンガンを少量含む黄灰色シルト質極細砂、極細砂質シルトが堆積している（第20図）。層相から人為的に埋められたものと判断される。

**出土遺物** 壽の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SK11（写真図版6）**

**概 要** 調査区中央部、SR01の西側、SK10・SK12に近接して位置している（第13図・第20図）。SK10・SK12との前後関係は不明で、一部中世の柱穴に切られている。

**形状・規模** N59° Wに主軸を持ち、平面形は長径81cm、短径69cmの梢円形を呈する。断面形は皿状で、検出面からの深さは18cmを測る。

**埋没状況** 上層に基盤層のブロックをわずかに含む細礫混り黄灰色極細砂～細砂、下層にやや明るい黄灰色極細砂～細砂が堆積している（第20図）。層相から人為的に埋められたものと判断される。

**出土遺物** 壽の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SK12（写真図版6）**

**概 要** 調査区中央部、SR01の西側、SK10・SK11に近接して位置している（第13図・第20図）。SK10・SK11との前後関係は不明で、一部中世の柱穴に切られている。

**形状・規模** N77° Eに主軸を持ち、平面形は長径100cm、短径71cmの梢円形を呈する。断面形は緩やかな弧状をなし、検出面からの深さは18cmを測る。

**埋没状況** 上から基盤層の塊を含む黄灰色極細砂～細砂、淘汰の悪い黄灰色細礫質極細砂、黄灰色極細砂～細砂が堆積している。最下層には暗褐色シルト塊が含まれ、人為的に埋められたものと考えられる。

**出土遺物** 壽の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

**SK13**

**概 要** 調査区南東部、SD12の南に位置している（第13図）。弥生時代の柱穴に切られている。

**形状・規模** 平面形はN34° Eに主軸をもつ梢円形であったと考えられる。長径は残存した部分で58cm、短径は44cmである。断面形は緩やかな弧状を呈し、深さは11cmを測る。

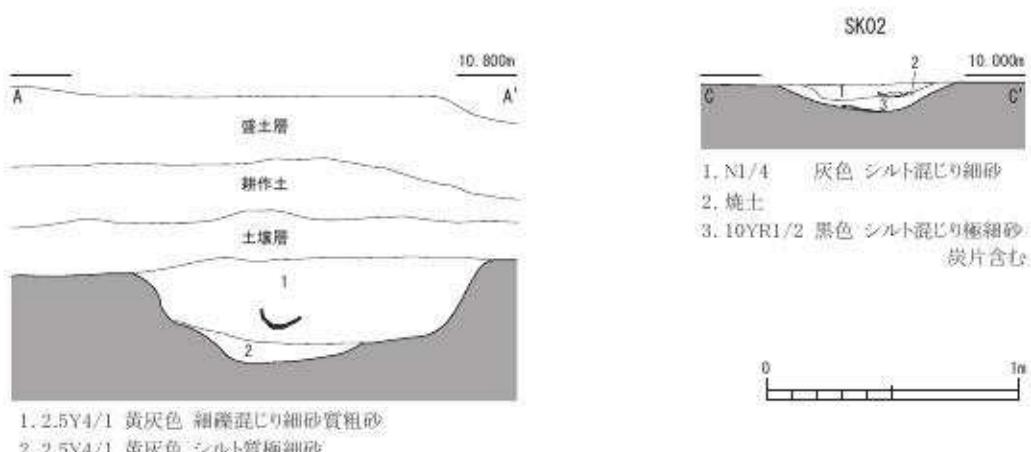
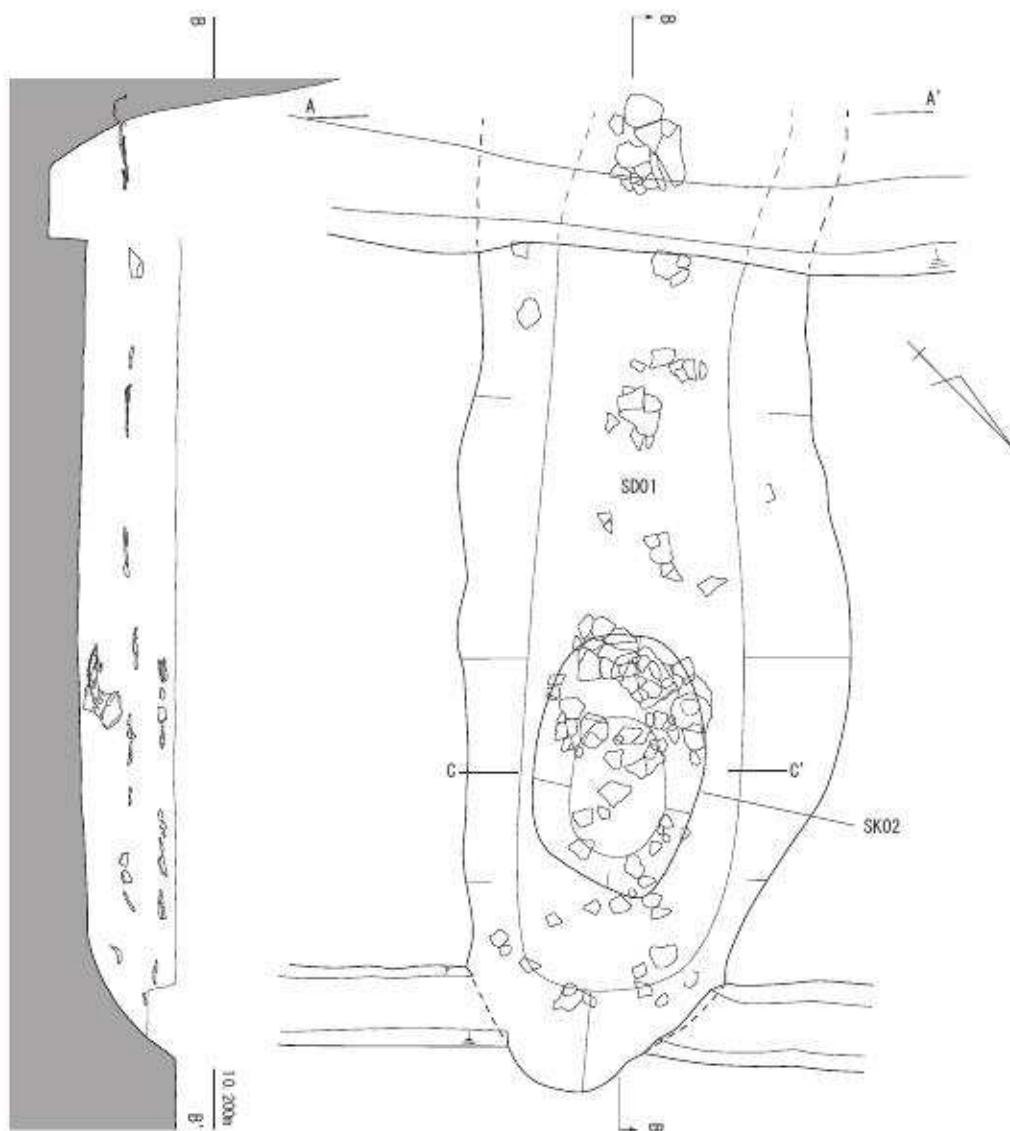
**埋没状況** 基盤層のブロックを含んだ黄灰色極細砂～細砂が堆積している。層相から人為的に埋められたものと判断される。

**出土遺物** 壽の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時 期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

(4) 溝

弥生時代の溝は11条検出している。



第21図 SK02・SD01

## SD01 (写真図版6・7)

**概要** 調査区南西部に位置する（第13図）。SK02に切られており、西側は調査区外へと続いている。今回の調査で最もまとまった量の遺物が出土している。これらは、遺物をあまり含まない埋土を挟んでほぼ水平に分布している。このため、層位によらずレベルによって便宜的に上層・中層・下層と呼び分けて取り上げている。なお、各レベルで平面的分布と破片の大きさ等、出土状況は異なっている。

**形状・規模** N49°Eに主軸を持つ。調査区外まで続

くため全長は不明であるが、検出長は3.75m、最大幅1.39mである。断面形は長軸及び短軸で船底状を呈し、最も深い所で40cmを測る。

**埋没状況** 上から黄灰色細礫混じり細砂質粗砂（第21図第1層）、黄灰色シルト質極細砂（第2層）が堆積しており、第1層が取り上げ層位の上層及び中層、第2層が下層に対応している。

いずれも流水していた痕跡はなく、土器の垂直方向における分布傾向と同じくほぼ水平に堆積している。ただし、埋没過程についてみると、両者が埋没するまでの間には多かれ少なかれ隙間が認められる。まず、下層出土土器が第2層に埋没し、一定期間の後にその上面に中層出土土器が投棄される。そして、第1層は全体に均質であることからごく短期間に埋没したものと思われる。このことは、上層と中層出土の土器が複数個体で接合する状況からも読み取ることができる。

**出土遺物** 上層からは壺・甕（6～8）が出土している（第34図）。中層・下層に比べて小片が多く、平面分布も東に偏っている（第23図）。

6は広口壺の口頸部であり、頸部に5条のヘラ描き沈線文が施されている。内面はミガキ調整、外面はハケ調整で仕上げられるが、全体に磨滅している。7は口縁部が最大径を有する逆L字状口縁甕であり、口縁端部はヘラによって浅く刻まれている。胴部上半には突帯及び沈線による文様が施文されており、横位の突帯により胴部を上下に分割したのち、2本の併行する縦位の突帯を貼り付けることで器面が8単位に区画されている。そして、区画内には半截竹管による「X」字状文が施文されている。ただし、磨滅が著しいため文様が明瞭でない部分も多い。8は如意形に外湾する甕の口縁部片である。外面はハケ調整で仕上げられ、その上に3条のヘラ描き沈線文が施されている。

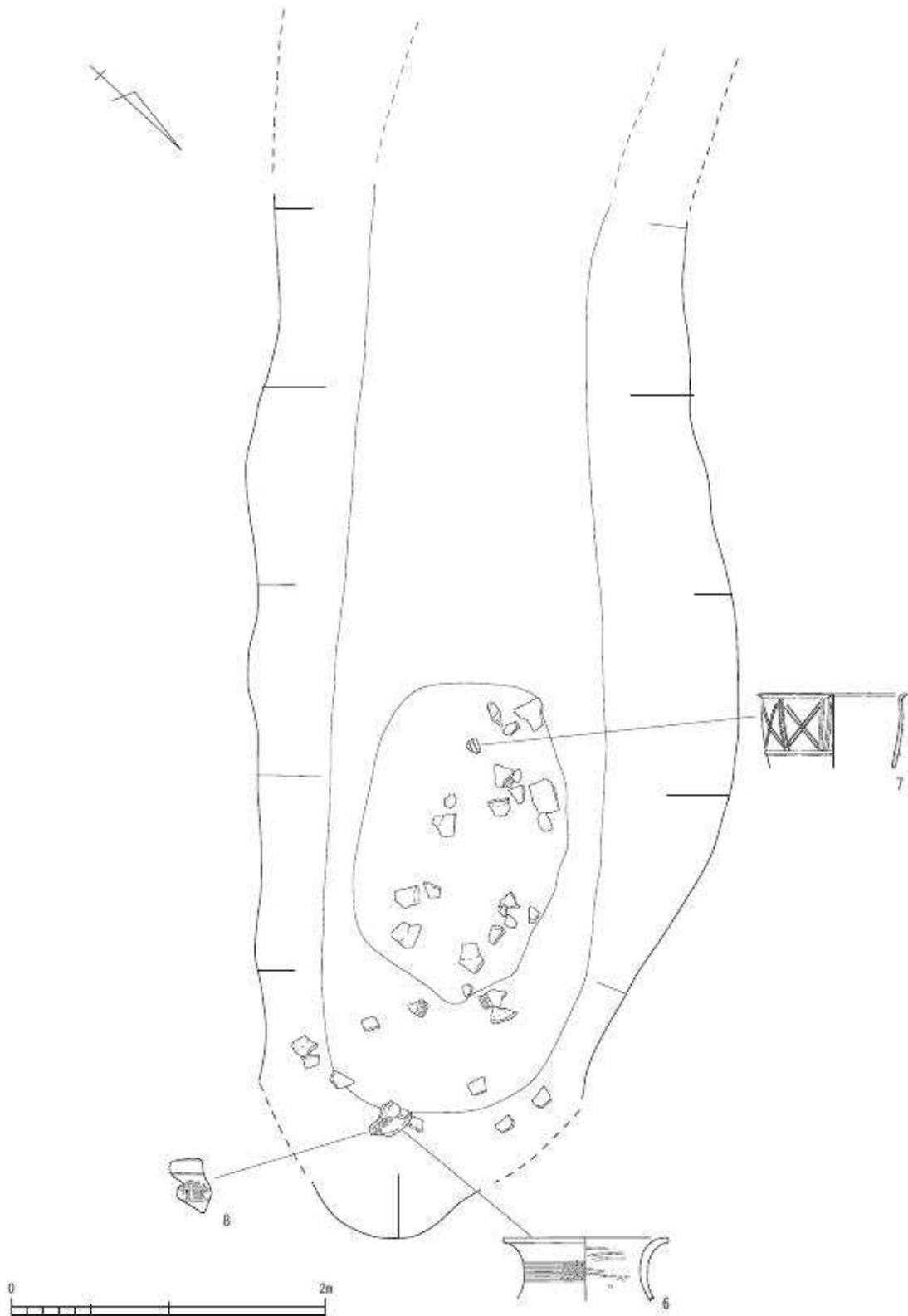
中層からは壺・甕（9～20）と石器（S1・S6）が出土している（第34・35・37図）。上層・下層の出土状況と比べると全体に広く分布し接合率も高いことから、投棄されたものであろう（第24図）。

9・10は広口壺である。9は口縁部を緩やかに外反させ、頸部にやや低平な3条の突帯が貼り付けられている。内外面ともに磨滅が著しく、調整は不明である。10は胴部中ほどに最大径を有し、頸部に1条以上、胴部上半に5条の貼付突帯を有する。胴部の突帯は頸部のものよりやや高く、棒状工具により幅5mmの押圧が5～10mm間隔で施されているが、磨滅のため不明瞭な部分が多い。ハケ調整により整形し、突帯を貼り付けた後にヘラミガキで仕上げられている。なお、SD09出土胴部片と接合関係にある。

11～14は如意形口縁甕で、最大径を胴部上半に有するもの（11・14）と胴部中ほどに有するもの（12・13）がある。11は外面をハケ調整、内面を板ナデで仕上げられている。頸部には口縁部を折り曲げ成形する際に付いた第2指～第5指のものと考えられる指頭圧痕が多数みられる。第1指にあたる箇所は口縁内面のハケ調整によって消されているが、指の向きに沿う形で斜め方向に器壁のうねりが見られる。

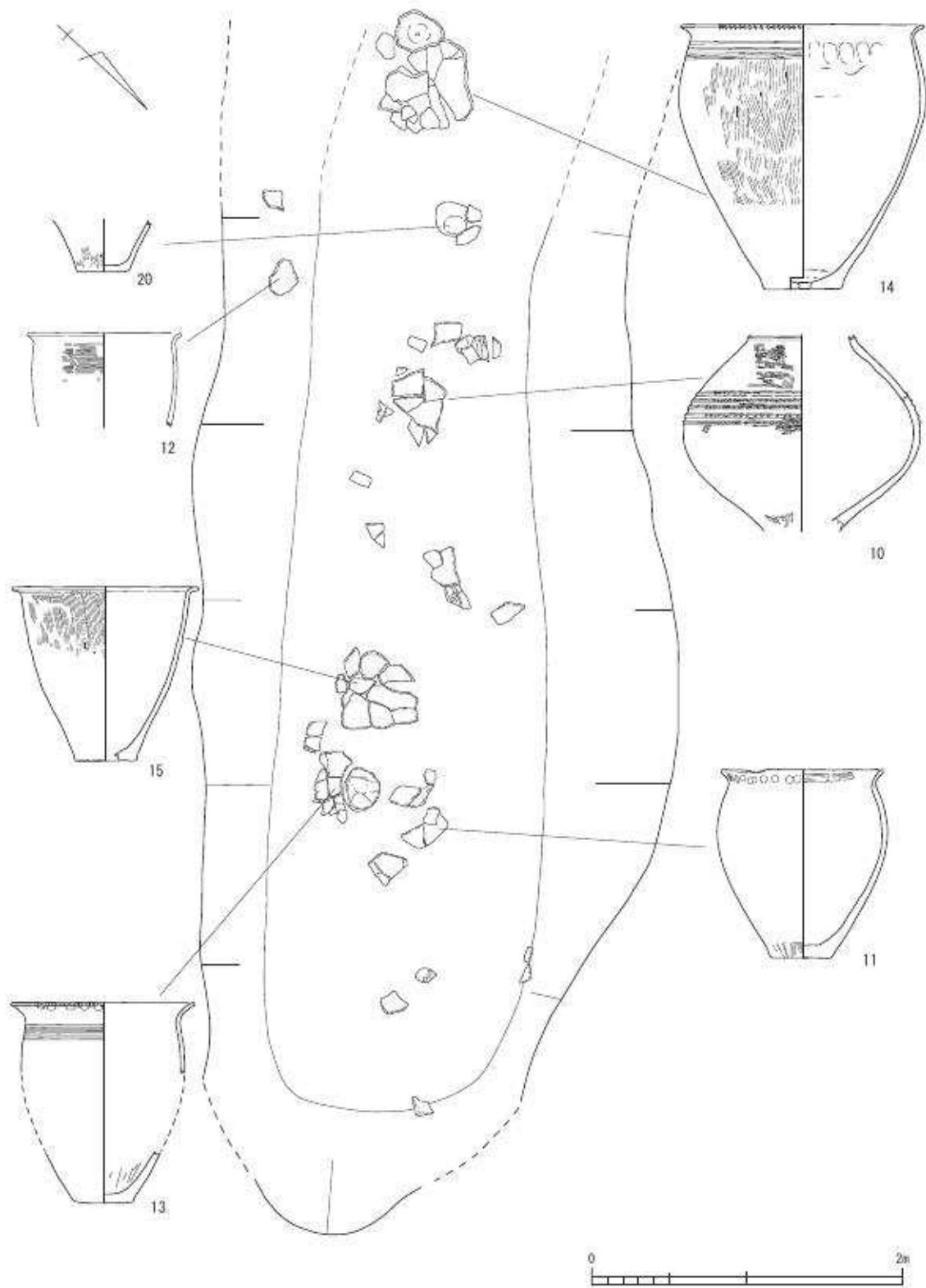


第22図 SD01 検出作業



第23図 SD01 上層土器出土状況

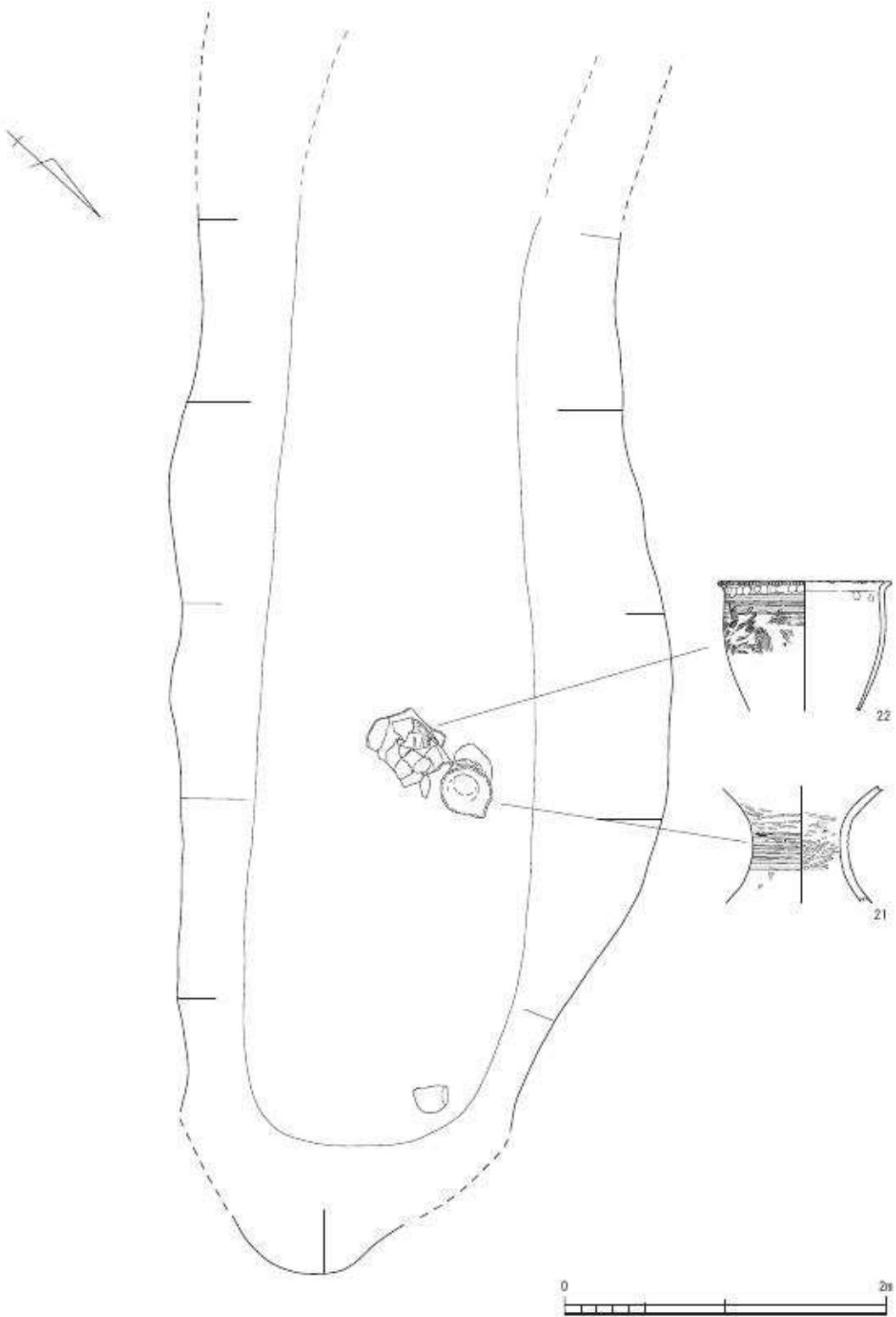
12は全体に磨滅が著しいが、ハケ調整のち胴部上半に11条のヘラ描き沈線が施されている。13は頸部に5条のヘラ描き沈線文が、口縁端部にヘラ状工具でキザミが施されている。全体的に磨滅しているが、外面は縦方向のハケ調整・内面は板ナデで仕上げられている。14は側溝掘削時に調査区西壁で出土した。今回の調査で出土したものの中で最大の甕であり、胴部最大径は32cmを測る。口縁端部には



第24図 SD01 中層土器出土状況

指先によるキザミ、胸部には丸棒状工具による4条の沈線がともに反時計回りに施されている。底部には焼成後に径1.4cmの孔が穿たれている。

15・16は口縁部に最大径を持ち、断面が逆L字状を呈する甕である。15は内外面ともに磨滅しているが、外面はハケ調整で仕上げられている。また、器壁外面にはモミ圧痕が残る。16はヘラ状工具で口縁端部



第25図 SD01下層土器出土状況

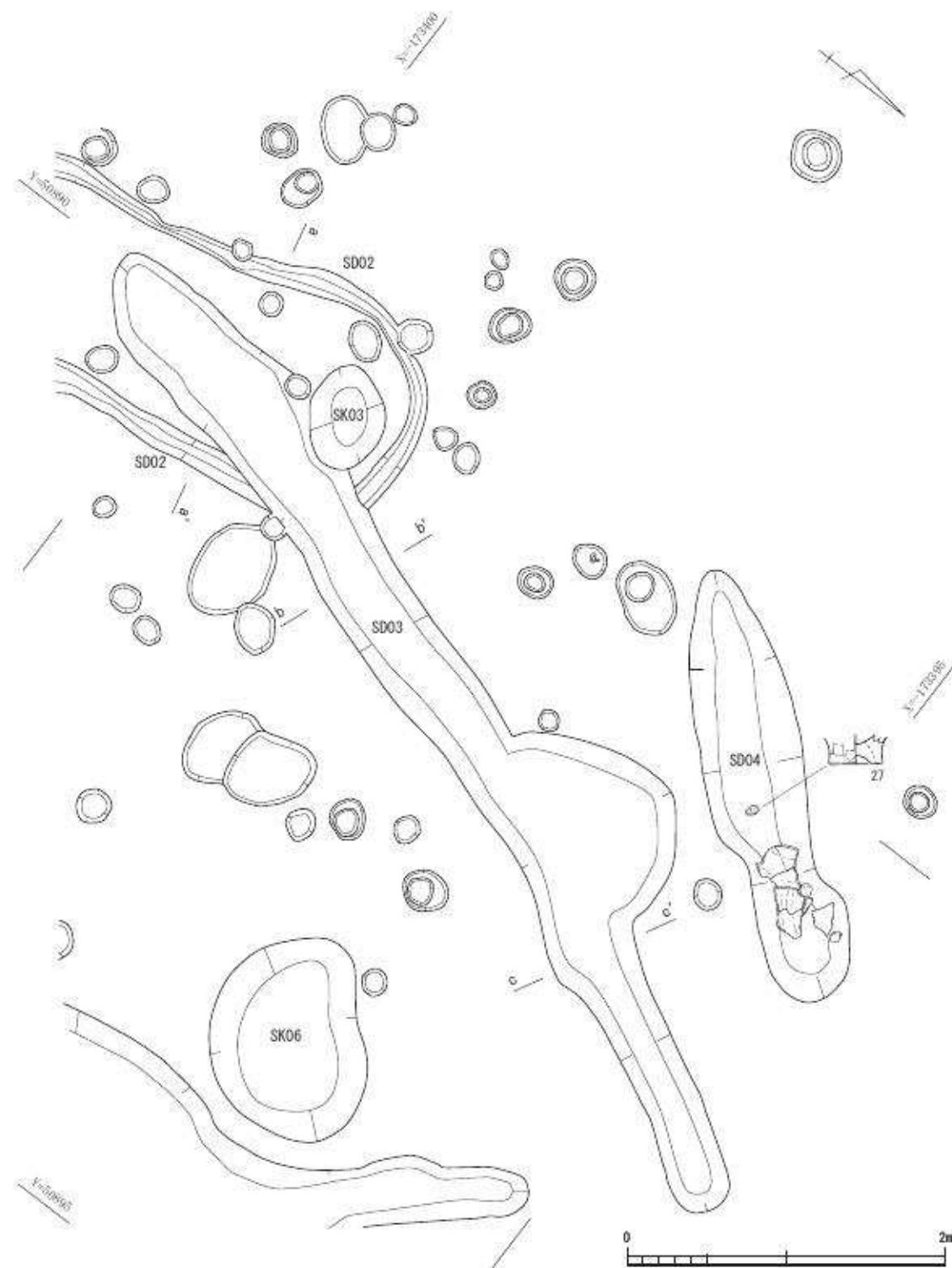
を刻み、2条の沈線文が施されている。17は甕の胴部片で、縦位及び横位に突帯が貼り付けられて器面を区画し、区画内にはヘラ状工具による多重弧線文が施されている。

石器は金山産サスカイト製の石鎌と石核が出土している。S 1は残存長16.5mm、幅15.9mm、厚さ2.8mmの凹基無茎式鎌である。側縁は直線的に調整されるが全体に粗雑で、剥離面を広く残す。基部の抉りは非常に浅く、一部欠損していることから製作途上の未成品と考えられる。S 6は長さ38.7mm、幅30.0mm、

厚さ13.3mmの石核である。

下層からは広口壺の頸部(21)と甕(22)が近接して出土している(第25図)。22は緩やかに外湾する口縁部で最大径を測り、ヘラ状工具による口縁端部のキザミと胴部上半への沈線文6条が施されている。頸部には文様施文後に整形した際の指頭圧痕が多数残っている。

時期 出土土器から弥生時代前期後半～中期初頭に位置付けられる。



第26図 SD02・SD03・SD04

#### SD02

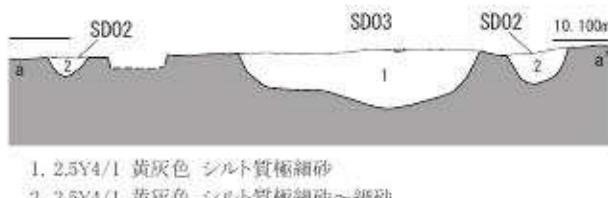
**概要** 調査区南西部に位置する（第13図、第26図）。SD03と切合関係にあり、SD03に切られている。南側は調査区外へと続いている。

**形状・規模** 一部調査区外まで続くため全容は不明である。幅16cm、深さ8cmの細い溝を東西2.5m、南北1.3mの範囲で「U」字状ないし梢円状の平面形で検出した。

**埋没状況** 黄灰色シルト質極細砂～細砂が単層で堆積しており、人為的に埋められた状況である（第27図）。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化していない。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。



1. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質極細砂

2. 2.5Y4/1 黄灰色 シルト質極細砂～細砂

1. N1/5 灰色 極細砂混じりシルト

1. 7.5Y1/5 灰色 細砂混じりシルト

第27図 SD02・SD03

#### SD03（写真図版7）

**概要** 調査区南西部に位置する（第13図・第26図）。SD02・SK03と切合関係にあり、SD02を切り、SK03に切られている。

**形状・規模** N20°Eに主軸を持ち、長さ6.43m、幅64cmの直線的な溝である。断面形は弧状を呈し、深さは15cmを測る。

**埋没状況** 西側は黄灰色シルト質極細砂～細砂が、東側は灰色細砂混じりシルトが堆積しており、北から南にむけて徐々に粒径が細くなっている（第27図）。

**出土遺物** 突帯を持つ深鉢口縁部片（23）、有文如意形口縁甕（24・25）が出土している（第36図）が、いずれも磨滅が著しい。24は口縁端部をヘラで刻み、4条以上のヘラ書き沈線文が施されている。なお、上から3条目の沈線上にはモミ压痕が見られる。25は口縁端部下面をヘラで刻み、4条のヘラガキ沈線文が施されている。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

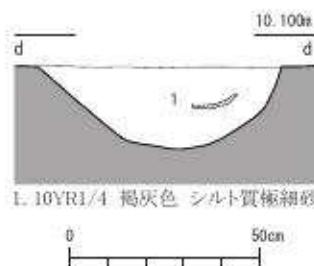
#### SD04（写真図版8）

**概要** 調査区南西部、SD03の西側に並行して位置する（第13図・第26図）。

**形状・規模** N40°Eに主軸を持ち、長さ2.59m、幅66cmの直線的な溝である。断面形は弧状であり、検出面からの深さは22cmを測る。

**埋没状況** 暗灰色シルト質極細砂が単層で堆積している（第28図）。

**出土遺物** 壺の胴部片（26）及び底部（27）が出土している（第36図）。26は外面をハケのちナデ調整で仕上げ、半截竹管による直線文が上から順に3単位以上施されている。27は本来平底であるが、成形時に基盤と



1. 10VR1/4 暗灰色 シルト質極細砂

第28図 SD04

なる半球状の粘土が剥離してドーム状をなしている。この他、図化しなかったが、壺の胴下部の大破片が出土している（第26図）。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭の所産である。

#### SD05

**概要** 調査区西部、SB01の西、SD01の北に位置する（第13図）。底面で2基の弥生時代の柱穴を検出しており、これらを切っている。

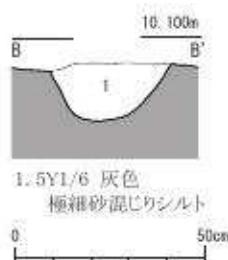
**形状・規模** N61°Eに主軸を持ち、長さ3.17m、最大幅45cmの直線的な溝である。

断面形は弧状をなし、検出面からの深さは15cmを測る。

**埋没状況** 灰色極細砂混じりシルトが単層で堆積している（第29図）。

**出土遺物** 口縁部が強く外反する無文壺（28）が出土している（第36図）。胴径が口径を凌ぎ、口縁内面を撫でつけながら端部がわずかにつまみあげられている。内外面とも板状工具によるナデ調整で仕上げられている。

**時期** 出土土器から弥生時代中期後半に位置付けられる。



第29図 SD05

#### SD06(写真図版9)

**概要** 調査区西部に位置する（第13図）。SB01と切合関係にあり、SB01-P3・P7に切られている。

**形状・規模** N26°Eに主軸を持ち、長さ5.23m、幅50cmの直線的な溝である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは16cmを測る。

**埋没状況** 灰色細砂混じりシルトが単層で堆積している。

**出土遺物** 壺の胴部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

#### SD08(写真図版9)

**概要** 調査区中央部、SR01の東、SD09の南に位置する（第13図）。

**形状・規模** N82°Eに主軸を持ち、長さ3.17m、幅22cmの直線的な細い溝である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは9cmを測る。

**埋没状況** 灰色細砂混じりシルトが単層で堆積している。

**出土遺物** 半截竹管による沈線文が施文された壺胴部が出土しているが、小片のため図化していない。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

#### SD09(写真図版9)

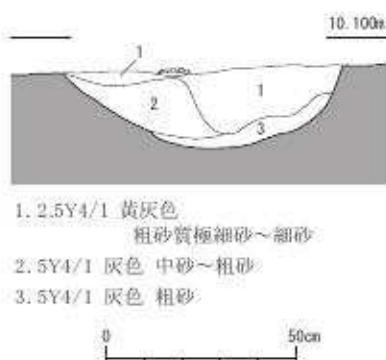
**概要** 調査区中央部、SR01の東、SD10の西に位置する（第13図）。

**形状・規模** N88°Eに主軸を持ち、長さ5.28m、幅74cmの直線的な溝である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは20cmを測る。

**埋没状況** 上から、黄灰色粗砂質極細砂～細砂、灰色中砂～粗砂、灰色粗砂が堆積しており、上層ほど細粒化している（第30図）。

**出土遺物** 短頸の広口壺口縁部片(29)と甕底部(30)の他、SD01出土広口壺(10)と接合する胴部片が出土している(第36図)。29は緩やかに外反する口縁部と胴部の境にキザミを施す突帯を貼り付けられている。角閃石を含むチョコレート色の胎土である。30は底径3.7cmと小ぶりであり、内面がヘラケズリ、外面が縱方向のナデ調整で仕上げられている。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。



第30図 SD09

#### SD10(写真図版9)

**概要** 調査区東南部、SD09の東に位置する(第13図)。

**形状・規模** N2°Wに主軸を持ち、長さ249m、最大幅54cmの直線的な溝である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは9cmを測る。

**埋没状況** マンガンが沈着した黄灰色細礫混じりシルト質極細砂が堆積しており、自然に埋没した状況を呈している。

**出土遺物** 壺及び甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化していない。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

#### SD11

**概要** 調査区東端に位置し、調査区外まで続いている(第13図)。

**形状・規模** N67°Eに主軸を持つ直線の溝である。1m程度の範囲しか検出していないが、全体でも3～4m程度の規模と考えられる。断面形は弧状を呈し、幅は最大22cm、検出面からの深さは8cmを測る。

**埋没状況** 上層の堆積する黒褐色極細砂質シルトには基盤層のブロックが含まれており、層相から人為的に埋められたと考えられる。

**出土遺物** 甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化していない。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

#### SD12(写真図版9)

**概要** 調査区東端に位置している(第13図)。西端は志筑川の旧流路に、東端は現流路によって削平されている。

**形状・規模** N88°Wに主軸を持ち、平面形は緩やかな弧状を呈する。断面形についても弧状であり、幅は最大で73cm、検出面からの深さは23cmを測る。

**埋没状況** 上層に基盤層ブロックを含んだ黒褐色極細砂質シルト、下層に中砂を主としたラミナ数条が認められる黄灰シルト質極細砂が堆積している。このことから、開口時流水していた溝が自然堆積により浅くなり、最終的に埋め戻されたものと考えられる。

**出土遺物** 壺の頸部片及び甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化していない。

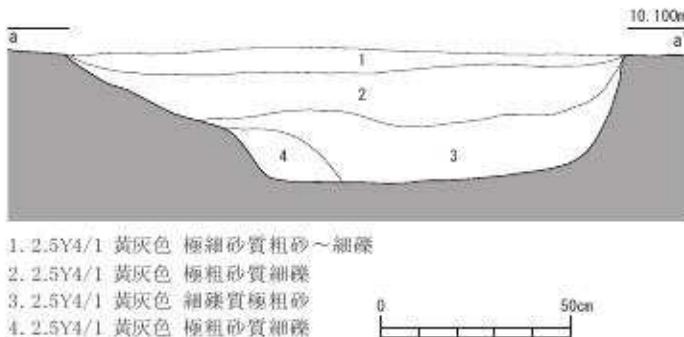
**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## (6) その他の遺構

## 流路跡 (SR01)

**概要** 調査区中央に位置しており、南は調査区外に続き、北は志筑川の旧流路に削平されている（第31図）。

**形状・規模** N24°Wに主軸を持ち、最大幅192cm、検出面からの深さ36cmを測る。調査区南壁付近で二股に分かれているが、西側はSK09付近で途切れ、東側はSK09に切られている。



第31図 SR01

**埋没状況** 上から黄灰色極細砂質粗砂～細礫、黄灰色極粗砂質細礫、黄灰色細礫質粗砂、黄灰色極粗砂質細礫が堆積している（第31図）。各層とも縦じて淘汰がよい。

**出土遺物** 壺（31・32・37）、有文如意形口縁甕（33・34）、無文甕（35）、鉢（36）、土製紡錘車（38）が出土している（第36図）。また旧河道に隣接する箇所で甕の口縁部（39）が出土している。

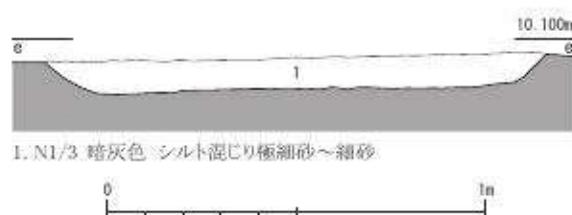
31は長頸壺の口縁部で、緩やかに内湾する口縁端部よりやや下がったところに突帯を貼り付けられている。32は外面をミガキ調整で仕上げられる壺の肩部で、2条の突帯が張り付けられているが、器面を1周せず途中で途切れている。37は壺の底部である。底径7.8cmの平底で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はハケ後ナデ調整で仕上げられている。33は11条以上のヘラ描き沈線文が施された胴部片である。34は口縁端部にキザミを施し、内外面はナデ調整で仕上げられている。結束のやや緩い4本1対の櫛歯状工具を用いて無文部を挟んで3段の櫛描文を配している。そして、その下端には円形浮文が等間隔に施されている。櫛描文帯は下から順に2帯・3帯・4帯と1帯ずつ増している。

35は胴部を縦方向にナデ上げ、口縁部を横方向にナデ調整して仕上げられている。胴部上半には植物繊維の圧痕が複数認められる。36の鉢は内面をハケのち縦ナデ調整、外面を横ナデ調整で仕上げられている。胴部最大径にあたる箇所には貼り付け突帯の剥離痕が残る。38は土器片を転用した土製紡錘車である。全体的に磨滅しているが、ナデの痕跡が一部残る。長さ4.1cm、幅4.4cm、厚さ0.5cmである。

**時期** 出土土器から弥生時代前期末～中期初頭に位置付けられる。

## 落込み (SX01)

**概要** 調査区西、SB01の北に近接して位置している（第13図・第18図）。SP01と切合関係にあるが、完掘後に検出したため前後関係は不明である。東端の一部は志筑川の旧流路に削平されている。



第32図 SX01

**形状・規模** 東西方向に主軸を持ち、平面形は東西3.16m、南北1.32mの歪な梢円形を呈する。断面形は、深さ8cmを測る皿状をなす。

**埋没状況** 暗灰色シルトの混じる細砂～極細砂が堆積している（第32図）。

**出土遺物** 甕の胴部片が出土しているが、小片のため図化していない。

**時期** 出土土器から、弥生時代中期初頭の所産である。

(7) 包含層出土遺物（第37図）

遺物包含層からは比較的まとまった量の土器が出土したが、総じて小片で磨滅しているものが多かつたため、図化報告できる資料は限られる。

42は外面をミガキ調整で仕上げられた壺の肩部片で、円形浮文を中心にヘラ描きの弧線文が2条施されている。また、弧線文の沈線内には一部赤色顔料が見られる。43～45は6～9条のヘラ描き沈線文を施す有文如意形口縁甕である。43は内面を横ナデ、外面を縦ハケ調整で仕上げられており、その上から反時計回りに7条の沈線文が施されている。44は口縁端部をヘラで反時計回りに押し引きながら刻み、胴部上半に9条以上の沈線文が施されている。内外面ともナデ調整で仕上げられ、口縁部外面には約2cmの間隔で指頭圧痕が残る。45は口縁端部がやや肥厚し、そこに板状工具を用いたキザミが施されている。内外面ともハケ調整で仕上げられている。46は無文のL字状口縁甕である。磨滅が著しいが、内面の一部にハケメが残る。47は口縁部が外反する有文甕で、半截竹管による横走沈線文が3段施文され、その下に径約5mmの円形浮文が5mm間隔で施されているが、剥落したものが多い。48は口縁部がゆるやかに外湾する鉢である。6本1対で結束した拗描直線文と、その下に径2mmの竹管状工具による列点文が2列施されている。

石器はサスカイト製の凹基無茎式鐵（S3・S4）と搔器（S5）が出土している。

S3は基部の抉りは浅く、器長の1/7程度である。両側縁とも直線的に立ち上がり、中ほどで先端に向かって折れ曲がる。S4は基部の抉りはやや深く、器長の1/4程度であり、両側縁とも直線的に調整されている。S5は自然面打面の剥片の末端側に両面から二次加工を施して刃部を作り出している。

### 3. 中世の遺構と遺物

#### (1) 柱穴

中世の柱穴は21基検出したが、建物を復元することはできなかった。このため、時期を特定できる柱穴について報告する。

#### SP09（写真図版3）

**概要** 調査区西部、SX01の西に位置する（第13図）。径28cmの円形であり、深さは6cmを測る。

**出土遺物** 土師器皿（40）が出土している（第36図）。内外面ともナデ調整で仕上げられている。

**時期** 出土遺物より中世に位置付けられる。

#### SP10

**概要** 調査区西部、SD07の東、SX01の西に位置する（第13図）。径22cmの円形であり、深さは16cmを測る。

**出土遺物** 土師器の小片が出土しているが、小片のため図化・器種の特定が困難である。

**時期** 出土遺物により中世に位置付けられる。

#### SP13

**概要** 調査区中央南部、SR01と切合関係にあり、SR01を切る（第13図）。径22cmの円形であり、検出面からの深さは8cmを測る。

**出土遺物** 遺物は出土していない。

**時期** 埋土より中世と判断される。

## (2) 溝

中世の溝は1条検出されている。

## SD07 (写真図版9)

**概要** 調査区西部に位置する（第13図）。東端の一部が志筑川の旧流路によって削平されている。

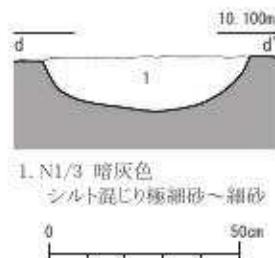
**形状・規模** N42°Wに主軸を持ち、長さ4.30m、最大幅80cmを測る直線の溝である。断面形は弧状を呈し、検出面からの深さは10cmを測る。

**埋没状況** マンガンが沈着した暗灰色シルト混じり極細砂～細砂が堆積しており、自然に埋没した状況を呈している（第33図）。

**出土遺物** 須恵器の甕(41)の口縁部～頸部にかけての小片が出土している（第

36図）。頸部で外折して口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部は面取りが施されている。全体に磨滅しているが、内外面とも輶轆によるナデ調整で仕上げられている。

**時期** 出土土器から、中世に位置付けられる。

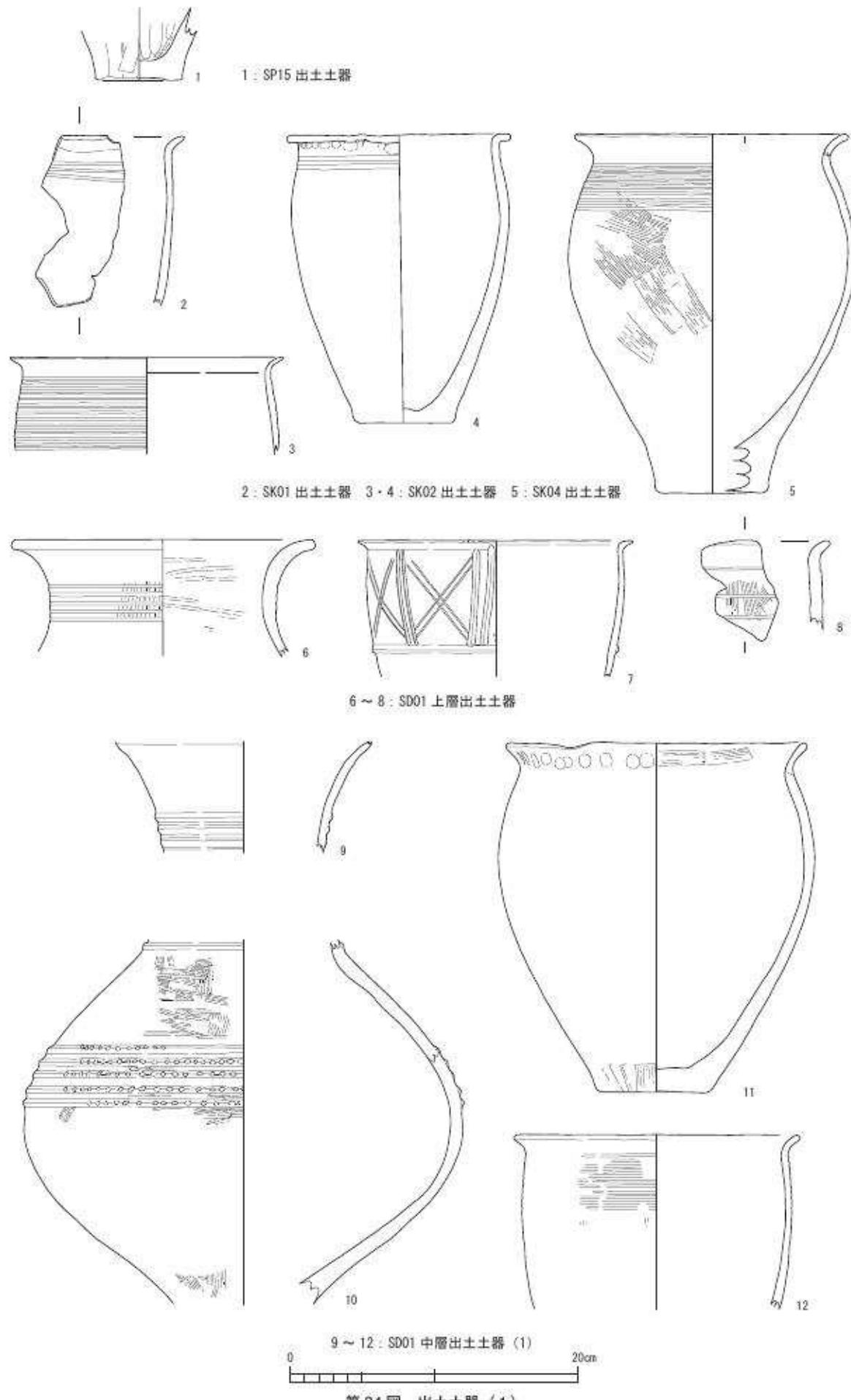


第33図 SD07

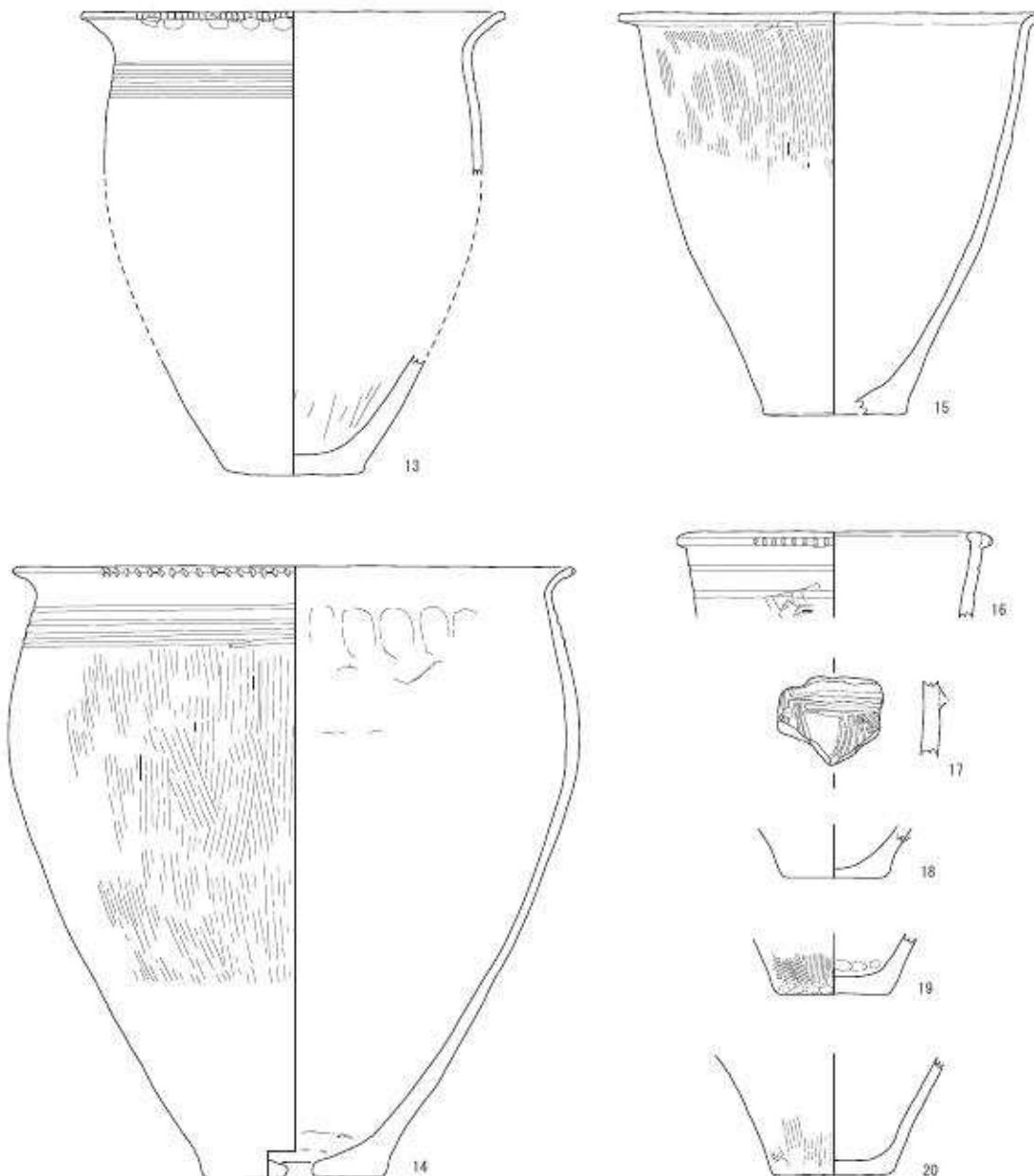
## (3) 包含層出土遺物（第37図）

当該期の遺物の出土は弥生時代のものに比べて疎らであり、施釉陶器（49）と須恵器の高台（50）のみ図化することができた。

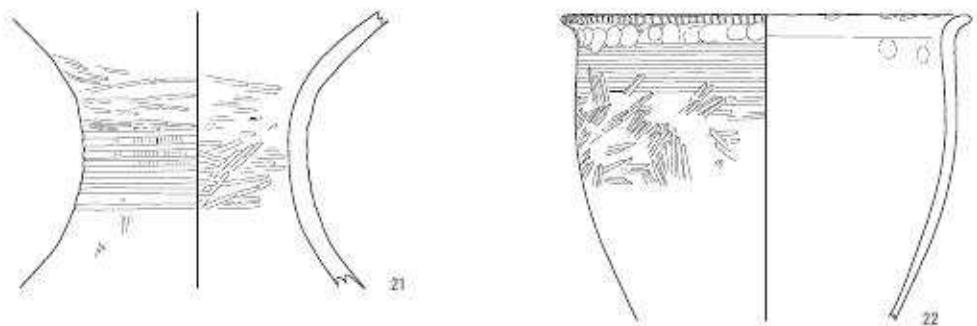
49は口縁部が1/6程度しか残存していないため全形は不明である。口縁部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部を一部つまみ上げ輪花状に成形されている。下端は屈曲して内面では明瞭な稜をなす。50は壺の高台と考えられ、外方に広がって、稜をなしている。底部内面には自然釉が付着している。



第34図 出土土器 (1)



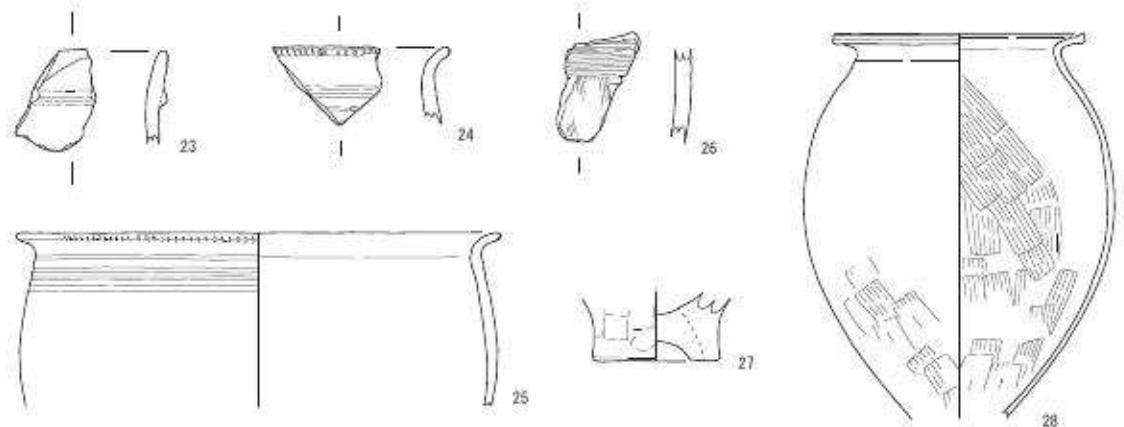
13～20 : SD01 中層出土土器 (2)



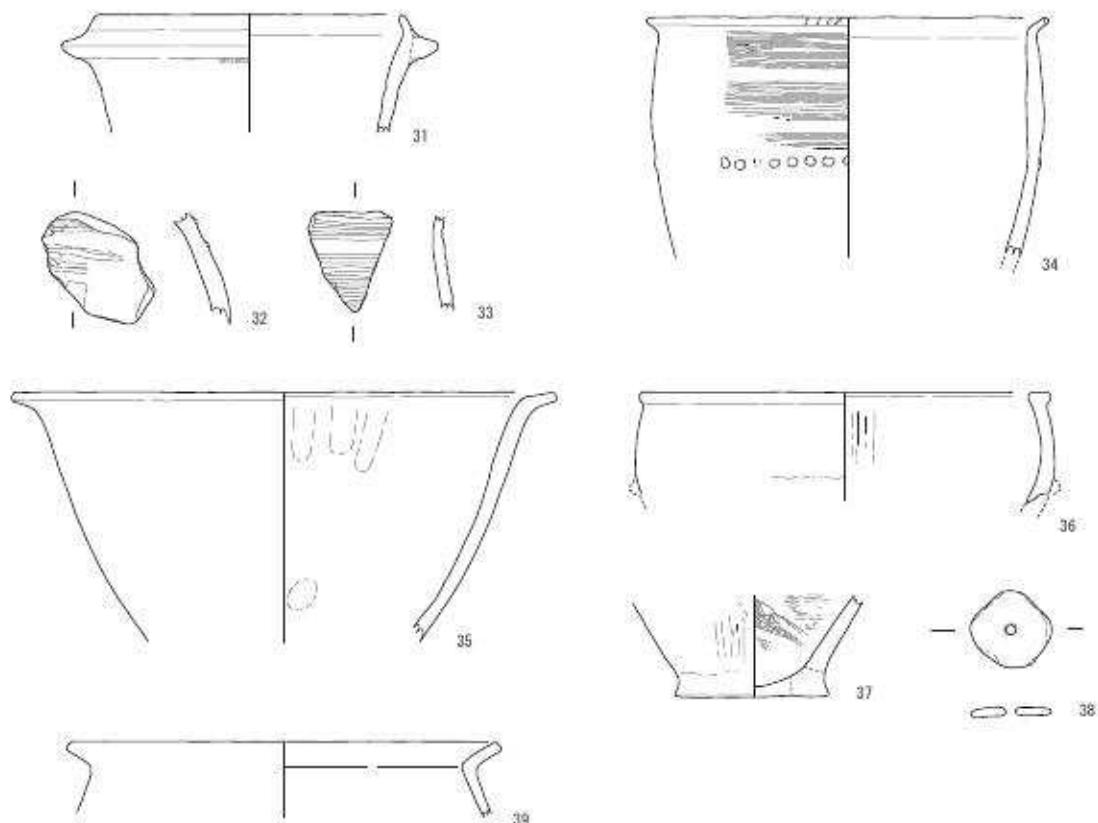
21・22 : SD01 下層出土土器



第35図 出土土器 (2)



23～25 : SD03 出土土器 26・27 : SD04 出土土器  
28 : SD05 出土土器 29・30 : SD09 出土土器

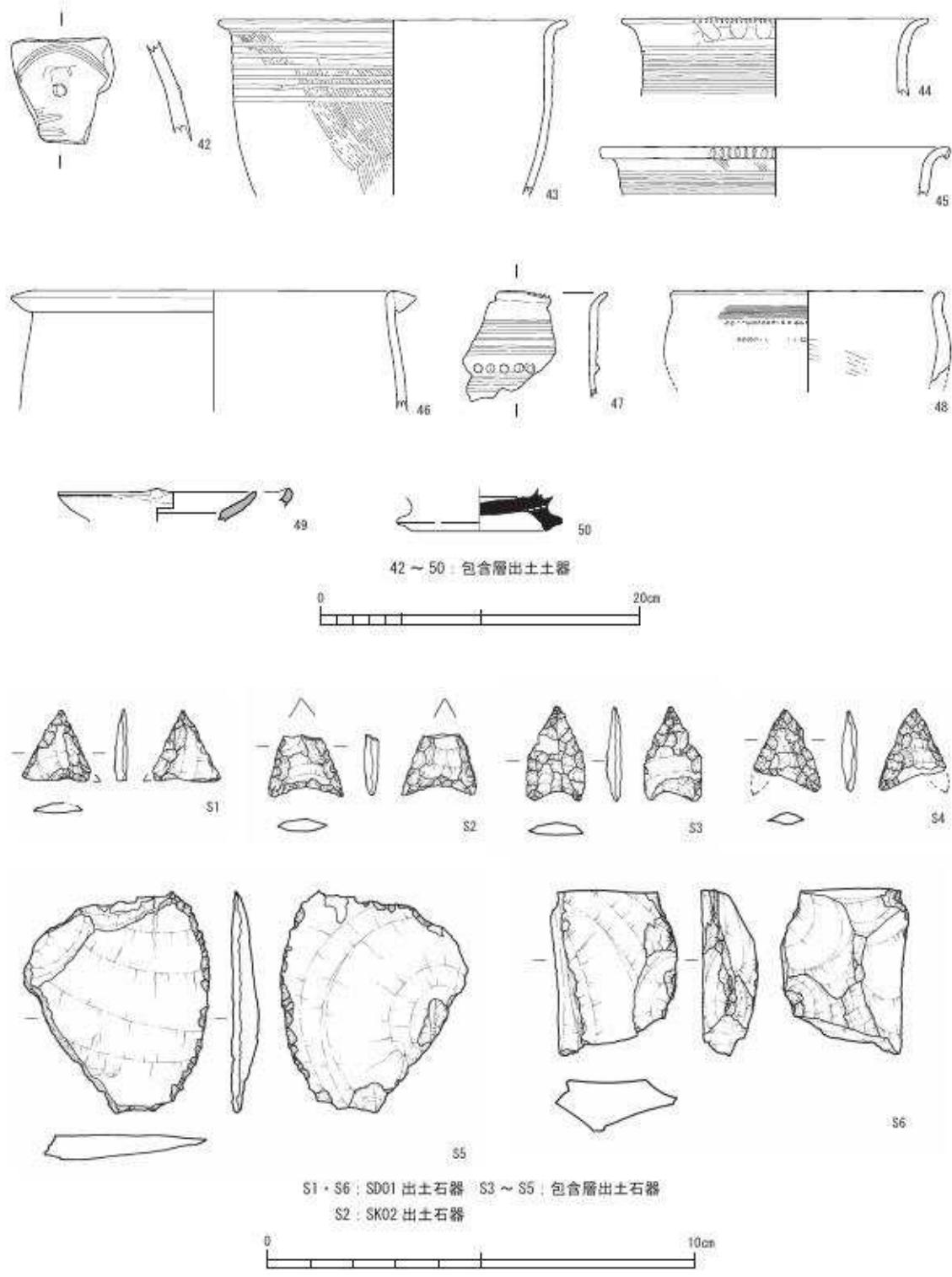


31～39 : SR01 出土土器

40 : SD09 出土土器 41 : SD07 出土土器



第36図 出土土器 (3)



第37図 出土土器(4)・出土石器

第2表 出土土器観察表 (1)

No.	種別	器種	遺構名	口径・長さ (cm)	器高・幅 (cm)	底径・厚み (cm)	残存状況	焼成	色調
1	弥生	甕	SP15		(5.05)	(6.0)	底部3/4	良好	褐灰～にぶい黄橙
2	弥生	甕	SK01		(11.8)		口縁部・体部わずか	良好	灰黄褐
3	弥生	甕	SK02	(18.9)	(6.85)		口縁部1/9	良好	にぶい黄褐～黄褐
4	弥生	甕	SK02	(15.3)	(20.0)	6.55	口縁部～体部1/4 底部完存	良好	褐灰～橙
5	弥生	甕	SK04	(18.7)	(25.0)	(7.9)	口縁部1/8 底部1/4		にぶい黄橙～橙
6	弥生	広口壺	SD01	(20.7)	(8.15)		口縁部～頸部1/4	良好	灰白～灰黄
7	弥生	甕	SD01	(19.0)	(9.5)		口縁部～体部1/4	良好	浅黄橙～にぶい橙
8	弥生	甕	SD01		(6.2)		小破片	良好	黄灰
9	弥生	広口壺	SD01	(17.8)	(7.7)		口縁部1/4	良好	浅黄橙～橙
10	弥生	壺	SD01		(25.3)		体部1/3		橙～明赤褐
11	弥生	甕	SD01	(20.4)	(24.3)	7.9	口縁部1/4 底部完存	良好	褐灰～橙
12	弥生	甕	SD01	(19.55)	(12.15)		口縁部～体部1/8	良好	灰黄褐
13	弥生	甕	SD01	(23.2)	(25.9)	7.7	口縁部1/6 底部完存	良好	褐灰～橙
14	弥生	甕	SD01	(31.4)	34.2	10.1	口縁部1/8 底部完存		黒褐～にぶい黄橙
15	弥生	甕	SD01	(24.0)	22.5	(7.9)	口縁部1/8 底部1/4		黒褐～橙
16	弥生	甕	SD01	(15.1)	(4.8)		口縁部1/9	良好	灰黄褐～褐灰
17	弥生	突帶部	SD01		(4.25)		小破片	良好	褐灰
18	弥生	甕	SD01		(2.95)	5.7	底部完存	良好	灰白～橙
19	弥生	壺	SD01		(3.4)	6.3	底部完存	良好	褐灰～にぶい黄橙
20	弥生	甕	SD01		(6.7)	6.7	完形	良好	褐灰～明赤褐
21	弥生	広口壺	SD01		(14.65)		頸部のみ	良好	灰黄～橙
22	弥生	甕	SD01	(21.0)	(16.1)		口縁部～体部2/3	良好	褐灰～橙
23	弥生	鉢	SD03		(14.9)		口縁部わずか	やや不良	黄灰～灰白
24	弥生	甕	SD03		(4.1)		口縁部わずか	良好	にぶい橙～橙
25	弥生	甕	SD03	(25.3)	(9.2)		口縁部1/7	良好	明赤褐～褐灰
26	弥生	甕	SD04		(5.2)～ (5.7)		小片	良好	黒褐
27	弥生	甕	SD04		(3.7)	(6.8)	底部1/2	良好	明赤褐
28	弥生	甕	SD05	(13.15)	(20.35)	(16.4)	口縁部1/7	良好	橙～灰黄褐

調整	胎土	備考	挿図 No.	写真図 版番号
外面：縦ハケ。 内面：縦ナデ。	1～5mmの砂粒含む		34	
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：横ナデ。	1～4mmの砂粒含む		34	10
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～3mmの砂粒多く含む		34	10
外面：口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ？ 内面：体部板ナデ→口縁部横ナデ。	1～4mmの砂粒含む		34	10
外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～6mmの砂粒含む		34	10
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ。	1～5mmの砂粒含む		34	10
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～5mmの砂粒含む		34	11
外面：体部ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～3mmの砂粒含む		34	11
外面：磨滅。 内面：磨滅。	1～3mmの砂粒多く含む		34	11
外面：縦ハケ→ヘラミガキ。 内面：磨滅。	1～5mmの砂粒含む		34	11
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部板ナデ。	1～3mmの砂粒含む		34	10
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～9mmの砂粒含む		34	11
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部横ナデ。	1～5mmの砂粒含む		35	12
外面：口縁部磨滅。体部ハケ。 内面：磨滅。	1～3mmの砂粒含む		35	12
外面：体部縦ハケ→口縁部横ナデ。 内面：口縁部～体部ナデ。	1～4mmの砂粒含む		35	12
外面：ハケ。 内面：口縁部ナデ。体部板ナデ。	1～3mmの砂粒含む		35	13
外面：ナデ。 内面：板ナデ。	1～4mmの砂粒含む		35	13
外面：縦ハケ→横ナデ。 内面：磨滅。	1～3mmの砂粒含む		35	
外面：縦ハケ→横ナデ。 内面：縦ナデ。	1～4mmの多く砂粒含む		35	
外面：ハケメ 内面：ナデ	1～4mmの砂粒含む		35	
外面：縦ハケ→ヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	1～6mmの砂粒含む		35	12
外面：口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ。 内面：口縁部横ナデ。体部板ナデ。	1～8mmの砂粒含む		35	12
外面：ヨコナデ 内面：磨滅	1～3mmの砂粒多く含む		36	
外面：縦ハケ→横ナデ 内面：ハケ	1～5mmの砂粒多く含む		36	13
外面：磨滅（体部ハケ）→口縁部ハケのちヨコナデ 内面：磨滅（ナデか）	1～4mmの砂粒多く含む		36	13
外面：縦ハケ 内面：磨滅	1～4mmの砂粒含む		36	
外面：縦ハケ 内面：ナデ	1～7mmの砂粒含む		36	13
外面：体部縦ハケ→口縁部横ナデ 内面：体部縦ハケ→口縁部横ナデ	1～5mmの砂粒多く含む		36	14

第3表 出土土器観察表（2）

No.	種別	器種	遺構名	口径・長さ (cm)	器高・幅 (cm)	底径・厚み (cm)	残存状況	焼成	色調
29	弥生	短頸壺	SD09	(12.4)	(3.0)		口縁部1/7	不良	黒
30	弥生	甕	SD09		(3.1)	3.7	底部1/2	良好	褐灰～灰白
31	弥生	長頸壺	SR01	(16.05)	(6.2)		口縁部わずか 体部1/8	良好	にぶい黄橙
32	弥生	壺	SR01		(5.9)		体部破片	良好	黒～灰黄褐
33	弥生	甕	SR01		(5.0)		体部破片	良好	黒～灰黄
34	弥生	甕	SR01	(21.1)	(12.75)		口縁部わずか 体部1/16		灰黄褐
35	弥生	甕	SR01	(28.7)	(13.2)		口縁部～体部1/12	良好	灰白～浅黄橙
36	弥生	鉢	SR01	(21.65)	(5.75)		小片		オリーブ黒
37	弥生	壺	SR01		(5.4)	7.8	底部完形	良好	にぶい黄橙
38	弥生	紡錘車	SR01	4.1	4.35	0.55	完形	良好	にぶい橙
39	弥生	甕	SR01	(20.9)	(3.4)		口縁部1/18	良好	黄灰～にぶい黄橙
40	土師器	皿	SP09	(11.7)	(3.8)		口縁部～体部1/4	良好	にぶい黄橙
41	須恵器	甕	SD07	(27.2)	(6.8)		口縁部1/16	やや不良	灰～灰白
42	弥生	壺	包含層		(6.15)		体部わずか		黒～にぶい黄橙
43	弥生	甕	包含層	(21.5)	(11.0)		口縁部1/3		褐灰
44	弥生	甕	包含層	(19.0)	(4.9)		口縁部1/12	良好	黒～にぶい黄橙
45	弥生	甕	包含層	(21.7)	(3.1)		口縁部わずか	良好	灰黄～浅黄
46	弥生	甕	包含層	(22.6)	(7.5)		口縁部1/12	良好	にぶい黄橙
47	弥生	甕	包含層		(6.6)		口縁部わずか	良好	灰黄～黒
48	弥生	鉢	包含層	(16.75)	(5.5)		口縁部1/10	良好	灰白～浅黄橙
49	陶器	耳皿	包含層	(12.2)	(2.05)		口縁部1/6	良好	灰白～灰黄
50	須恵器	壺	包含層		(2.65)	(8.4)	底部1/4	良好	灰白

調整	胎土	備考	挿図 No.	写真図 版番号
外面：磨滅 内面：磨滅	1～4mmの砂粒含む	生駒西麓産？	36	13
外面：縦ハケ 内面：ヘラケズリ	1～4mmの砂粒多く含む		36	14
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～4mmの砂粒含む		36	14
外面：ヘラミガキ。 内面：磨滅。	1～3mmの砂粒多く含む		36	
外面：ナデ。 内面：ハケ。	1～2mmの砂粒含む		36	
外面：口縁部～体部ナデ 内面：口縁部横ナデ。体部ナデ。	1～4mmの砂粒含む		36	14
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～6mmの砂粒含む		36	15
外面：ヨコナデ。 内面：縦ハケ→ナデ。	1～3mmの砂粒含む		36	15
外面：ヘラミガキ 内面：底面ナデ→ハケ	1～4mmの砂粒含む		36	
外面：磨滅。 内面：磨滅。	1～3mmの砂粒含む		36	15
外面：磨滅。 内面：磨滅。	～1mmの砂粒含む		36	
外面：ナデ？ 内面：ナデ？	1～3mmの砂粒含む		36	16
外面：磨滅 内面：磨滅	～1mmの砂粒含む		36	16
外面：ハケ→ヘラミガキ。 内面：磨滅。	1～5mmの砂粒含む		37	16
外面：体部ハケ。口縁部磨滅 内面：ヨコナデ	1～4mmの砂粒含む		37	16
外面：口縁部横ナデ。 内面：口縁部横ナデ。体部縦ナデ。	1～3mmの砂粒含む		37	
外面：ハケ。 内面：横ハケ。	1～3mmの砂粒含む		37	
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：磨滅。	1～3mmの砂粒多く含む		37	16
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部磨滅。	1～5mmの砂粒含む		37	16
外面：口縁部横ナデ。体部磨滅。 内面：口縁部横ナデ。体部ハケ。	1～3mmの砂粒含む		37	17
外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	～1mmの砂粒含む		37	17
外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。	～1mmの砂粒含む		37	17

第4表 出土石器一覧表

No.	器種	遺構名	長さ	幅	厚み	残存状況	備考	挿図 No.	写真図 版番号
S 1	石鎌	SD01	1.65	1.59	0.28	脚部折損	金山産サヌカイト	37	17
S 2	石鎌	SK02	1.45	1.80	0.30	先端折損	金山産サヌカイト	37	17
S 3	石鎌	包含層	2.15	1.35	0.33	完形	金山産サヌカイト	37	17
S 4	石鎌	包含層	1.85	1.55	0.28	脚部折損	金山産サヌカイト	37	17
S 5	搔器	包含層	5.13	4.30	0.58	完形	金山産サヌカイト	37	17
S 6	石核	SD01	3.87	3.00	1.33		金山産サヌカイト	37	17

## 第4章 大円道向遺跡出土のサスカイト製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

淡路市中田に所在する大円道向遺跡は、氾濫原に立地する弥生時代～中世の集落遺跡である。遺跡より出土した弥生時代のサスカイト製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

### 2. 試料と方法

分析対象は、大円道向遺跡より出土したサスカイト製石器、計10点である（第5表）。石器はいずれも風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて自然面を避けつつ風化層を一部除去し、新鮮面を露出させて測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法としては、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法（例えば望月2004）を

第5表 分析対象一覧

用い、分析対象をサスカイトに置き換えて適用した。方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）とルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

試料No	出土遺構	出土層位	時期	重量(g)
1	SR01	下層	弥生時代前期末～中期初頭	6.6
2	SR01	上層	弥生時代前期末～中期初頭	3.6
3	包含層			2.9
4	SK12	埋土	弥生時代前期末～中期初頭	9.1
5	包含層			5.3
6	SD01	埋土	弥生時代前期末～中期初頭	4.6
7	SD01	中層	弥生時代前期末～中期初頭	7.0
8	SD01	中層	弥生時代前期末～中期初頭	2.7
9	SD01	上層	弥生時代前期末～中期初頭	2.7
10	SD01	上層	弥生時代前期末～中期初頭	2.3

$$1) \text{ Rb 分率} = \text{Rb 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$2) \text{ Sr 分率} = \text{Sr 強度} \times 100 / (\text{Rb 強度} + \text{Sr 強度} + \text{Y 強度} + \text{Zr 強度})$$

$$3) \text{ Mn 強度} \times 100 / \text{Fe 強度}$$

$$4) \log(\text{Fe 強度} / \text{K 強度})$$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図）を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表させた上で、分析対象の石器と同様の条件で測定した。第6表に各原石の採取地とそれぞれの試料点数を示す。

第6表 原石採取地と判別群名称

都道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
奈良	二上山 香川 讃岐	春日山	春日山みかん畑内(10)、株山(61)
国分台1		自衛隊演習場付近(5)、神谷神社前(13)、高産靈神社谷(12)、国分台下みかん畑(5)、神谷(17)、蓮光寺(26)、出雲神社裏手(8)	
国分台2			
国分台3			
赤子谷・法印谷		赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)、法印谷(10)	
金山1		北峰道路脇(10)、金山南麓(31)、金山北東部(27)	
金山2			
城山		城山南側(5)、城山北側(5)	
雄山・雌山		雄山(5)、雌山(5)	
双子山		双子山南嶺(10)	

### 3. 分析結果

第7表に石器の測定値および算出された指標値を、第38図と第39図に、サヌカイト原石の判別図に石器の分析結果をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を円で取り囲んである。

測定した石器のうち、1点は春日山、1点は国分台2、4点は金山1、1点は金山2・城山の範囲およびその周辺にプロットされた。残り3点は合致する判別群がなく、不明であった。ただし、産地不明の3点のうち、試料No.2とNo.7は互いに近い位置にプロットされており、同一の判別群の可能性がある。ここでは不明1とした。第7表に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少なく、讃岐地方あるいは二上山産と推定された7点も他の産地の可能性が無いとは言い切れないが、少なくとも判別図の一一致しなかった産地のサヌカイトではないといえる。

第7表 分析値および産地推定結果

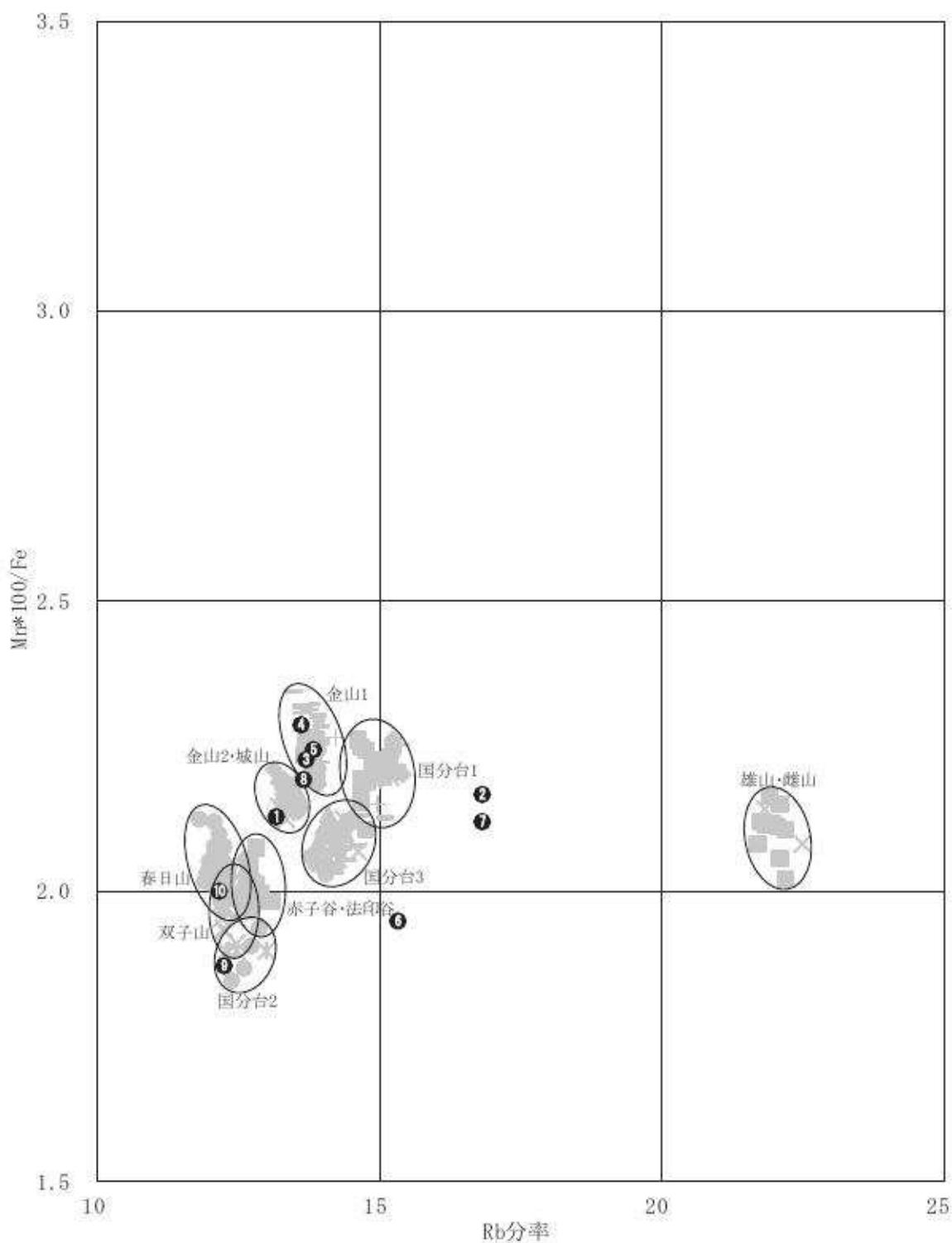
試料 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100 Fe	Sr分率	log Fe K	判別群
1	163.5	146.9	6900.6	379.9	1087.8	214.0	1207.7	13.15	2.13	37.65	1.63	金山2・城山
2	205.0	121.8	5624.4	522.1	1205.0	245.4	1133.6	16.81	2.17	38.80	1.44	不明1
3	196.8	178.5	8009.5	498.5	1326.9	266.2	1547.2	13.70	2.23	36.46	1.61	金山1
4	208.3	190.3	8315.6	499.2	1340.3	266.3	1567.3	13.59	2.29	36.49	1.60	金山1
5	211.3	188.5	8397.6	515.3	1356.0	268.0	1585.4	13.83	2.25	36.41	1.60	金山1
6	195.3	128.6	6599.0	445.0	1236.0	232.4	995.5	15.30	1.95	42.49	1.53	?
7	198.5	118.4	5590.7	502.5	1161.7	238.2	1083.0	16.83	2.12	38.91	1.45	不明1
8	180.4	162.7	7411.4	454.3	1215.6	243.2	1415.9	13.65	2.19	36.52	1.61	金山1
9	178.6	155.3	8292.3	394.9	1370.2	231.2	1234.0	12.22	1.87	42.42	1.67	国分台2
10	200.1	186.4	9327.8	405.6	1548.0	247.3	1137.4	12.15	2.00	46.37	1.67	春日山

### 4. おわりに

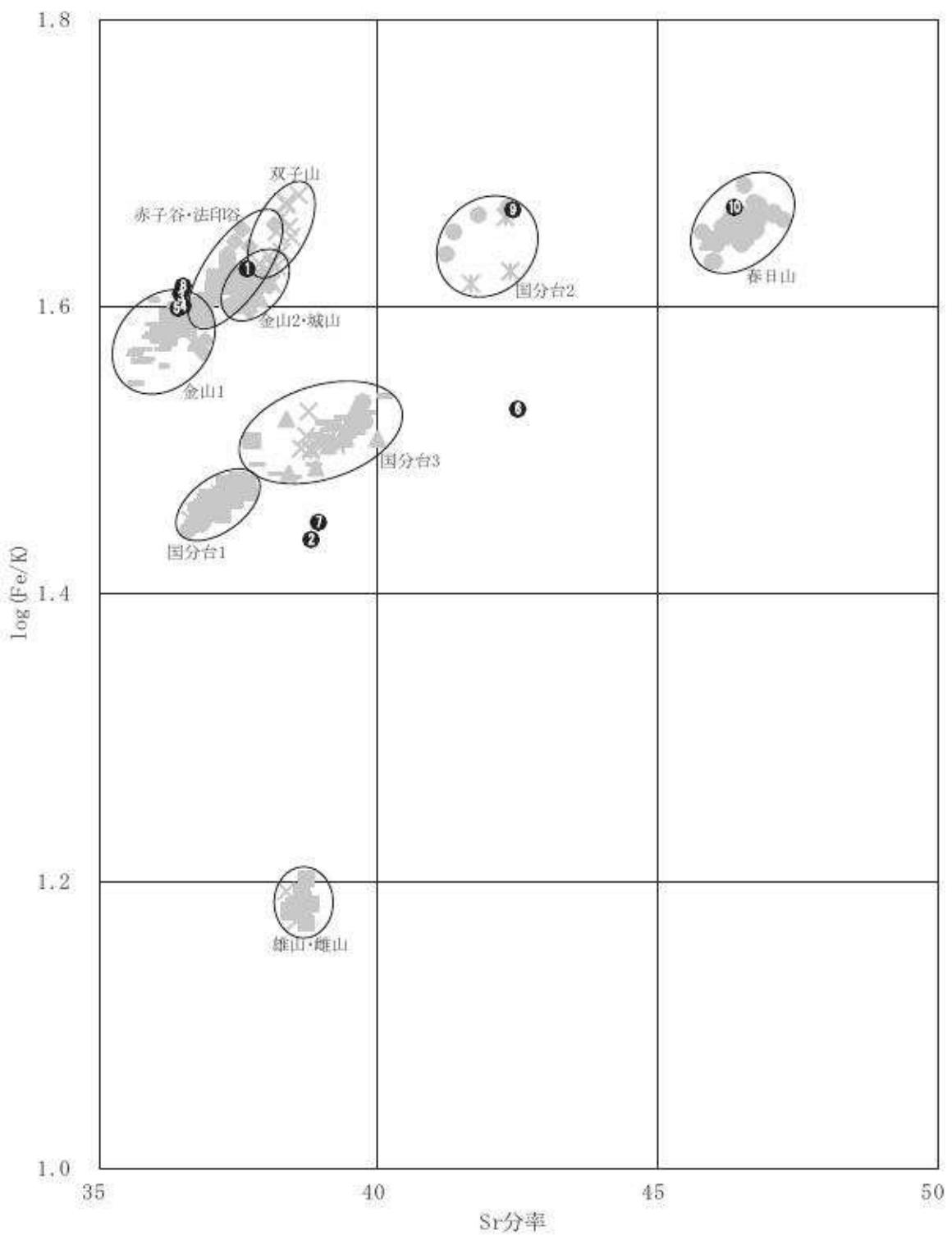
大円道向遺跡より出土したサヌカイト製石器10点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、1点は二上山産、6点は讃岐地方産の可能性が高いと推定された。残り3点は合致する判別図がなく産地不明であったが、うち2点は同一産地の可能性がある。

### 引用・参考文献

- 望月明彦(2004)用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定. かながわ考古学財団編「用田大河内遺跡」: 511-517. かながわ考古学財団.



第38図 サヌカイト産地推定判別図(1)



第39図 サヌカイト産地推定判別図 (2)

## 第5章 まとめ

## 第1節 遺物

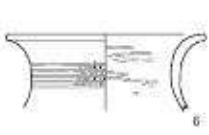
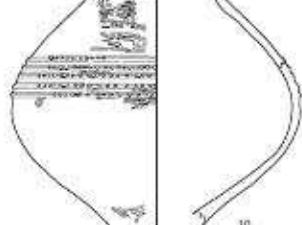
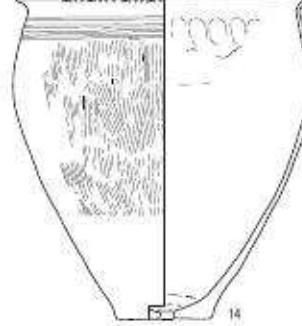
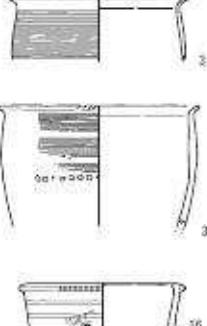
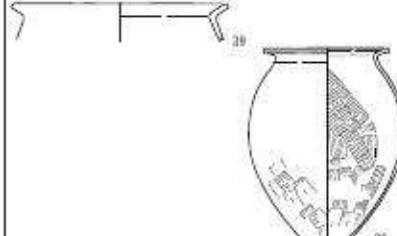
## 1. 土器

はじめに 前章までで触れたとおり、大円道向遺跡では弥生時代の遺構と遺物が大部分を占めており、とりわけ SD01 からは比較的まとまった量の土器が出土している。本項では遺構出土の弥生土器を中心に扱い、その帰属時期について検討する。

**出土器種** 壺・甕・鉢・台付鉢が出土しているが、甕が 24 個体分で最も多く、統いて壺が 7 個体、鉢・台付鉢については 1 ~ 2 個体に限られる。このため、まず甕について分類を行ったのち、その他の器種について言及する。

**甕** 形態は口縁部が如意形に外反するもの（以下、外反口縁甕）、口縁部が外方に三角形に突出する逆 L 字状口縁のもの（以下、逆 L 口縁甕）、口縁部がく字状に屈折するもの（以下、く字口縁甕）の 3 種類がある。出土量は外反口縁甕がもっとも多く、19 個体であるのに対し、逆 L 口縁甕とく字口縁甕はともに 2 個体ずつと大きく比率は異なるが、外反口縁甕と逆 L 口縁甕は SD01 で共伴している。なお、周辺の天神遺跡等で出土している、胎土に結晶片岩を含む甕は非常に少ない。

外反口縁甕は無文、ヘラ描き沈線文、櫛描直線文がある。ヘラ描き沈線文は 6 条以上に多条化したものと、沈線間の幅が広がった少条のものがある。逆 L 口縁甕についても無文と沈線間が広い少条のヘラ描き沈線文が施される。以上の特徴から、外反口縁甕と逆 L 口縁甕は中期初頭に位置付けられる。

	I 期	2 期
壺	  	
甕	  	
その他		

第 40 図 弥生土器

## 第5章　まとめ

く字口縁甕は内外面ともハケ調整が施され、口縁端部が上方にわずかに突出する。これらの特徴から、中期後葉に相当すると考えられる。

**壺** SD01 から広口壺が4個体出土している。口縁部は伸長しており、頸部に沈線文を有するものと貼付け突帯で加飾するものがある。また、球胴のものは肩部に多重の貼付け突帯が施され、頸体部界を貼付け突帯で区画されている。以上の特徴から、前期末～中期初頭に位置付けられると考えられる。

**鉢・台付鉢** 流路 SR01 および包含層より鉢と台付鉢が出土している。包含層出土の鉢は口縁部が緩やかに外反し、櫛描文及び列点文が施されており、中期初頭に位置付けられる。

SR01 出土のものは口縁部がく字状になるものと口縁部および体部に貼付け突帯を施すものがある。前者は中期中葉、後者は中期後葉に位置付けられる。

**小結** 以上から、大円道向遺跡出土の弥生土器は前期末～中期初頭（1期）を中心とし、中期中葉～後葉（2期）のものがわずかに含まれる（第40図）。

## 第2節　遺構

**はじめに** 前節の検討で大円道向遺跡の遺構の時期は弥生時代と中世からなることが明らかとなった。また、弥生時代については、1期（前期末～中期初頭）と2期（中期中葉～後葉）の2時期に細分できることが明らかになった。そこで、弥生時代の遺構の変遷についてまとめることとする。

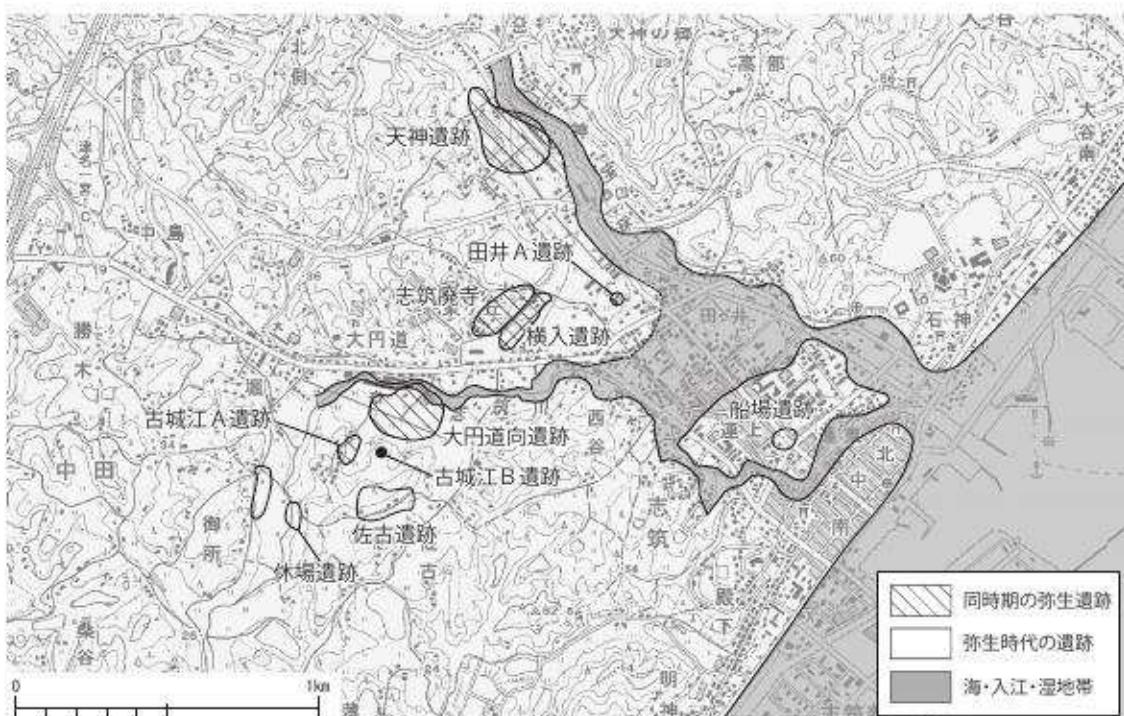
**1期** 時期の特定が可能な遺物及び切合関係により SK01・SK02・SK04・SD01・SD02・SD03・SD04・SD09 が該当する。また、細片ではあるが出土した遺物により SB01・SK03・SK05・SK06・SK07・SK08・SK09・SK11・SK12・SK13・SD06・SD08・SD10・SD11・SD12 も当該期に位置付けられる。

**2期** SD05・SR01 に限られる。

## 第3節　総括

最後に、今回の調査成果について列挙してまとめとする。

- ①大円道向遺跡は志筑平野を流れる志筑川右岸の完新世段丘上～氾濫原に立地する遺跡である。
- ②調査の結果、弥生時代と中世の遺構・遺物が明らかとなっている。
- ③弥生時代の遺構・遺物については、大きく前期末～中期初頭の1期と中期中葉～後葉の2期の2時期に分けられる。1期については掘立柱建物・柱穴・溝・土坑が検出されており、最も遺構密度が高い。2期になると活動の痕跡は疎らになり、溝と自然流路を検出するにとどまる。
- ④中世の遺構は柱穴と溝に限られる。
- ⑤大円道向遺跡の所在する志筑平野には横入遺跡・田井A遺跡・志筑廃寺・天神遺跡・船橋遺跡・古城江A遺跡などが周知されている。これらの多くは完新世段丘上に位置しており、いくつかの遺跡については発掘調査が行われている。



第41図 綱文時代の海岸線と周辺の弥生時代遺跡

なかでも、大円道向遺跡に最も隣接するものの一つである横入遺跡からは弥生時代中期前半を過る環濠と前期～中期の水田跡・旧河道内の杭列が検出されている点は注目される。住居跡は見つかっていないが、周間に一定程度の集落が営まれていたと考えられる。また、そこから宝珠川を500mほど遡った地点に位置する天神遺跡からは前期末～中期中葉の竪穴住居・掘立柱建物跡・溝の遺構が多数見つかっている。この他、田井A遺跡と志筑廃寺からも前期に位置付けられる土器が出土している。

以上から、中田地区～志筑地区では弥生時代前期～中期にかけて志筑川と宝珠川に挟まれた丘陵裾の平野各地で集落が営まれていたものといえる。これらの遺跡の立地場所は、縄文時代の入り江の周辺部にあたる（第41図）。この様子は、弥生時代の開始期において、弥生文化伝播の状況を物語っているものと考えられる。

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	おえどむかいいせき							
書名	大円道向遺跡							
副書名	〔志筑川水系志筑川 広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書〕							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第506冊							
編著者名	山田清朝・大本朋弥・竹原弘展(パレオ・ラボ)							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号(兵庫県立考古博物館内) Tel.079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 Tel.078-362-3784							
発行年月日	平成31(2019)年3月25日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 Tel.079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因	
大円道向遺跡	淡路市中田	28226	880131	34° 26' 9"	134° 53' 14"	平成28年7月20日～ 9月8日 (2016041)	570m <sup>2</sup>	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大円道向遺跡	集落跡	弥生時代	柱穴・土坑・溝	弥生土器・サヌカイト製石鐵				
		中世	掘立柱建物・柱穴	土師器皿				
要約	<p>大円道向遺跡は志筑平野を流れる志筑川右岸の完新世段丘上～氾濫原に立地する遺跡である。調査の結果、弥生時代と中世の遺構・遺物が明らかとなっている。</p> <p>弥生時代の遺構・遺物については、大きく前期末～中期初頭の1期と中期中葉～後葉の2期の2時期に分けられる。1期については掘立柱建物・柱穴・溝・土坑が検出されている。2期については、溝と自然流路に限られる。</p> <p>中世の遺構については、柱穴と溝に限られる。</p> <p>大円道向遺跡の立地場所は、縄文時代の入り江の周辺部にあたり、周辺の遺跡動態と合わせてみると弥生時代の開始期において、弥生文化伝播の状況を物語っているものと考えられる。</p>							

# 写 真 図 版

写真図版 54 遺構



全景 東から



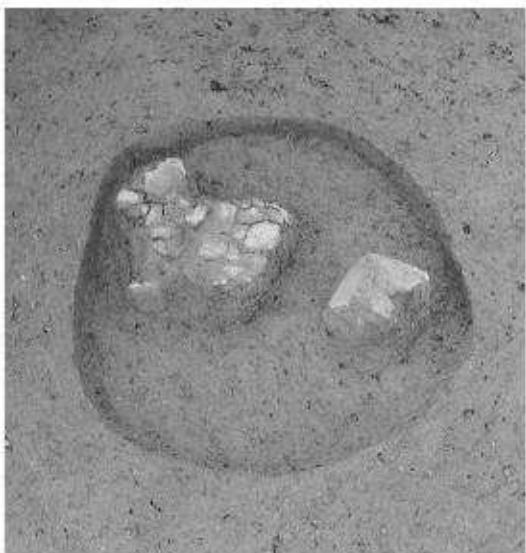
全景 西から

写真図版 55 遺構



俯瞰

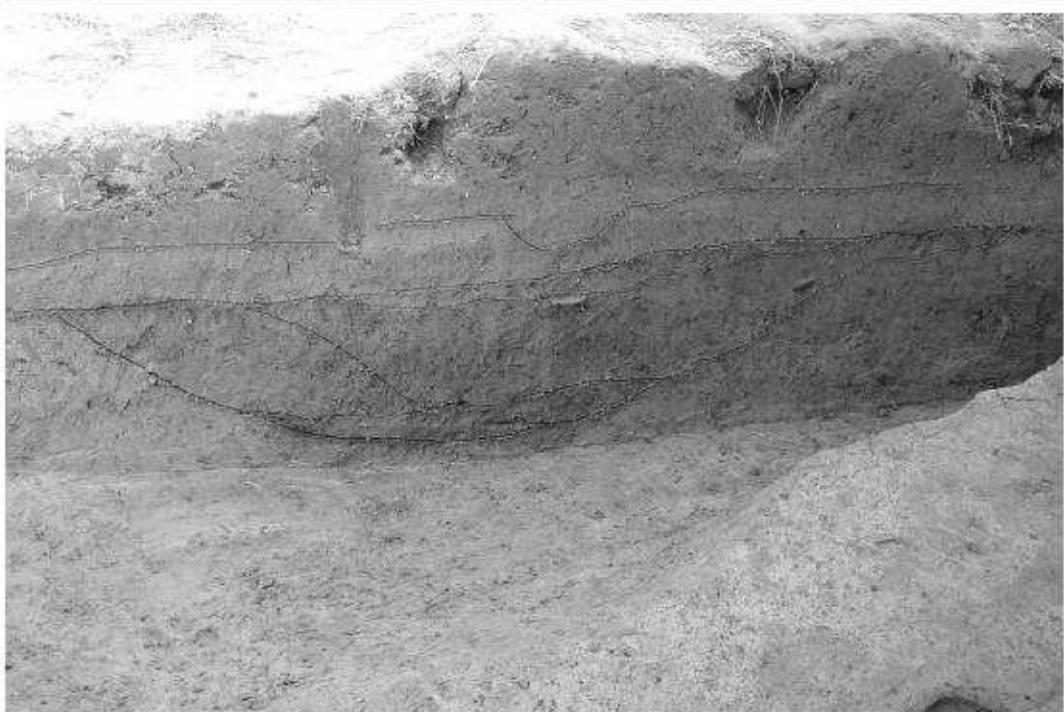
写真図版 56 遺構



左  
SP09 土器出土状況  
北から  
右  
SP15 土器出土状況  
南から



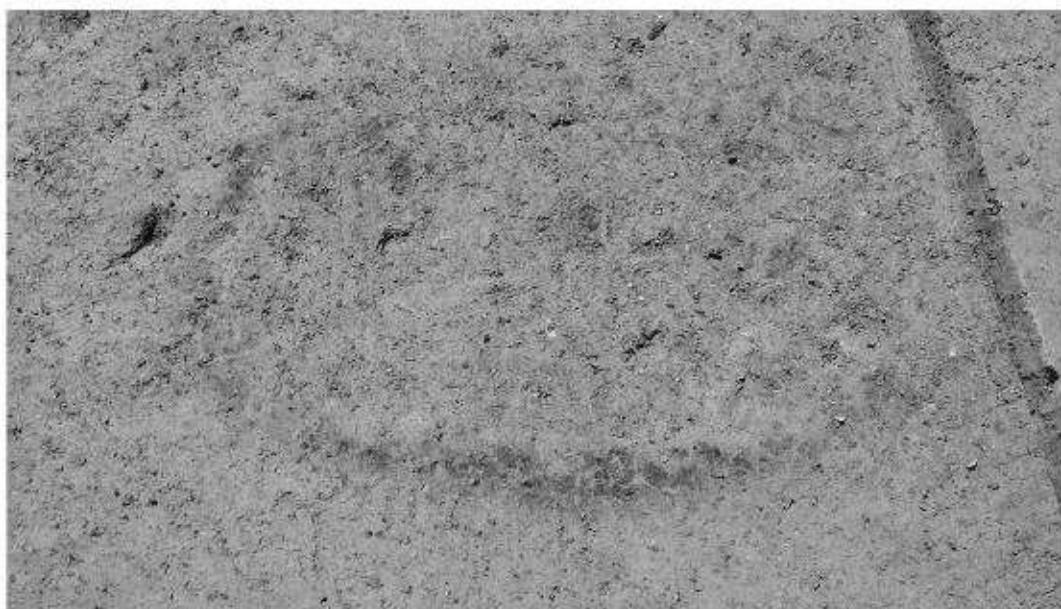
左  
SP14 断面 南から  
右  
SP14 断面 南から



SK01 断面 北から

写真図版 57 遺構

SK02  
上面検出状況 南から



SK02  
下層検出状況 南から



SK02  
横断面 東から



写真図版 58 遺構



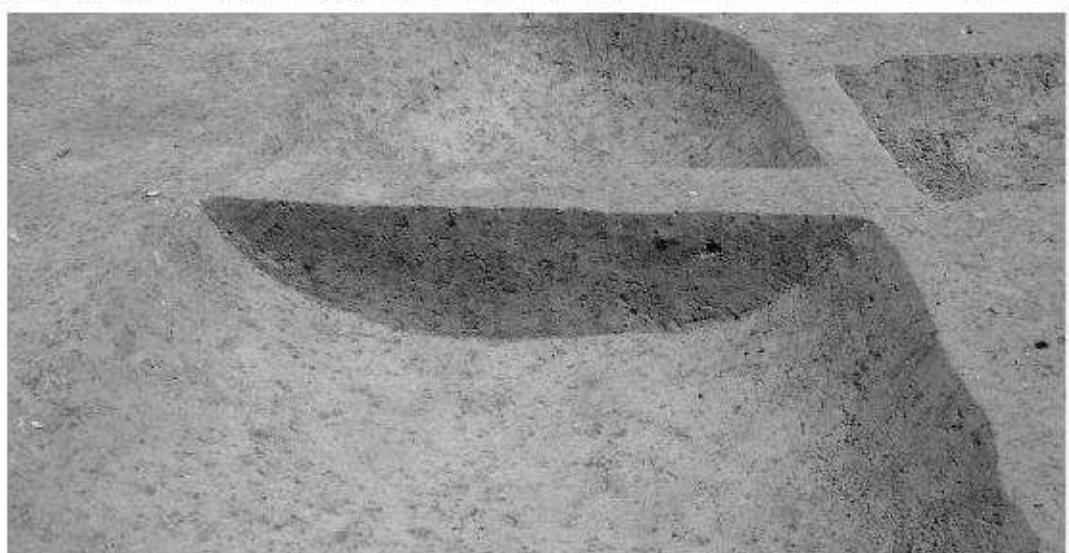
左 SK03  
横断面 西から  
右 SK04  
土器出土状況  
南東から



左 SK05  
横断面 北から  
右 SK07  
横断面 西から



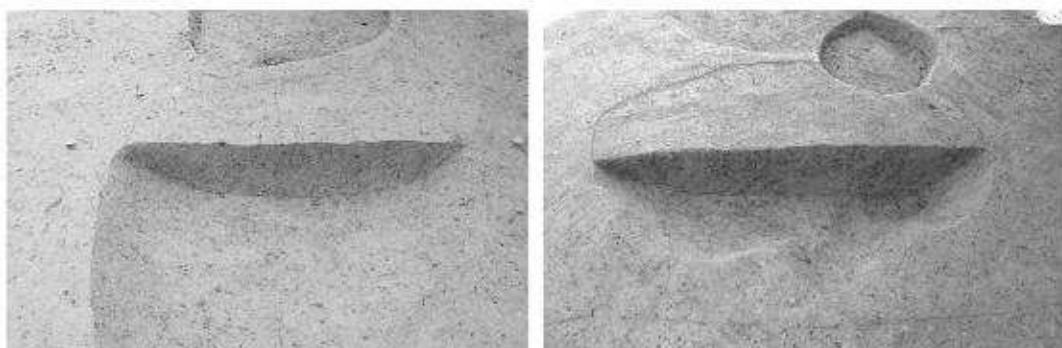
SK06  
横断面 南から



SK09  
横断面 西から

写真図版 59 遺構

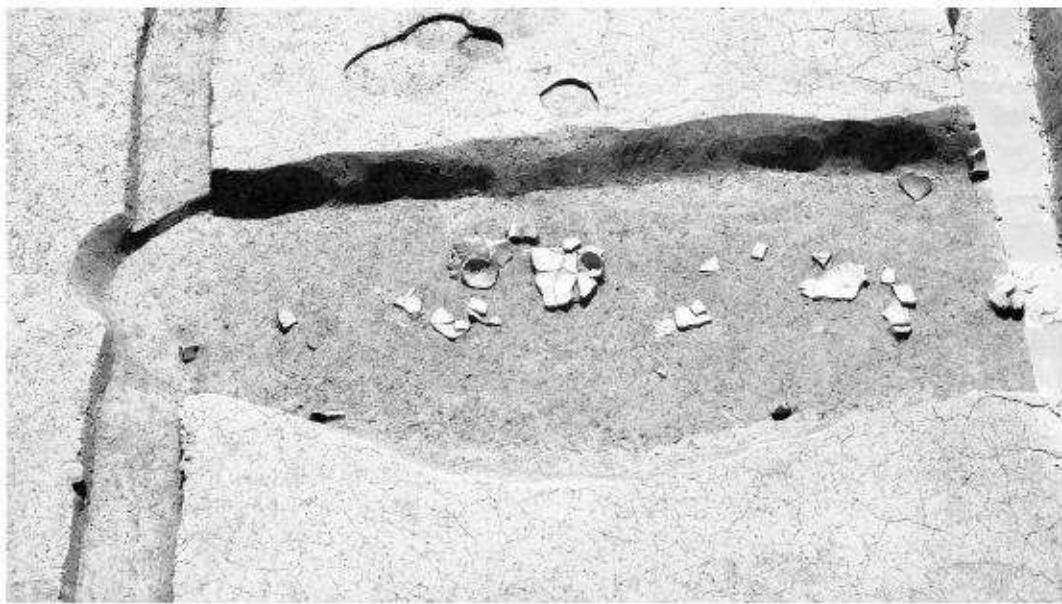
左 SK11  
横断面 北東から  
右 SK12  
横断面 北から



SD01  
土器出土状況（上層）  
西から



SD01  
土器出土状況（中層）  
北から



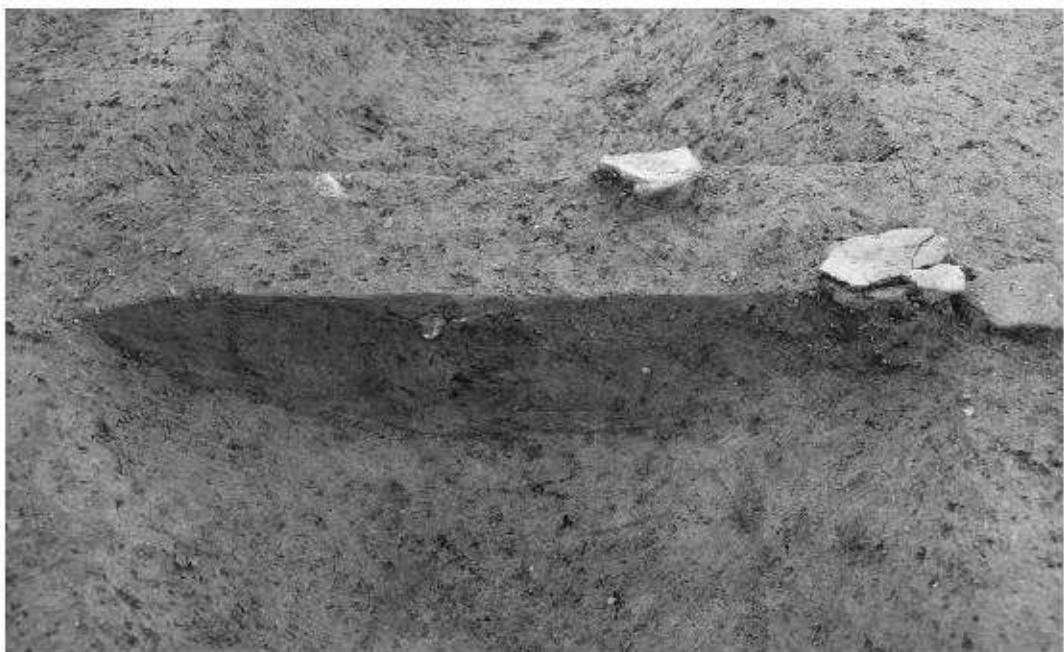
写真図版 60 遺構



SD01  
土器出土状況（中層）  
北から



左  
SD01  
土器 21・22 出土状況  
西から  
右  
SD03  
土器出土状況  
東から



SD03  
横断面 北東から

写真図版 61 遺構

SD04  
横断面 西から



SD04  
土器出土状況  
西から



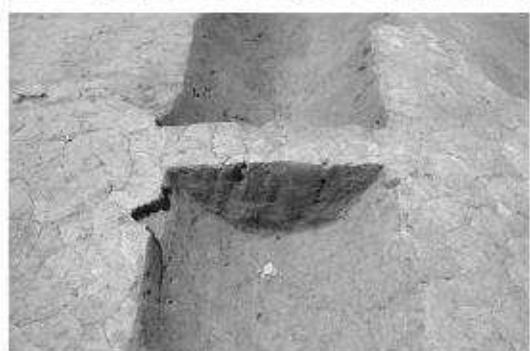
写真図版 62 遺構



左  
SD06  
横断面 北東から  
右  
SD07  
横断面 南から



左  
SD08  
横断面 東から  
右  
SD09  
横断面 西から



左  
SD10  
横断面 北から  
右  
SD12  
横断面 東から

写真図版 63 遺物



2



5



3



6



4



11

2 : SK01 出土土器

3・4 : SK02 出土土器

5 : SK04 出土土器

6・11 : SD01 出土土器

写真図版 64 遺物



7



8



9



10



12

7～10・12：SD01 出土土器

写真図版 65 遺物



13



15



14



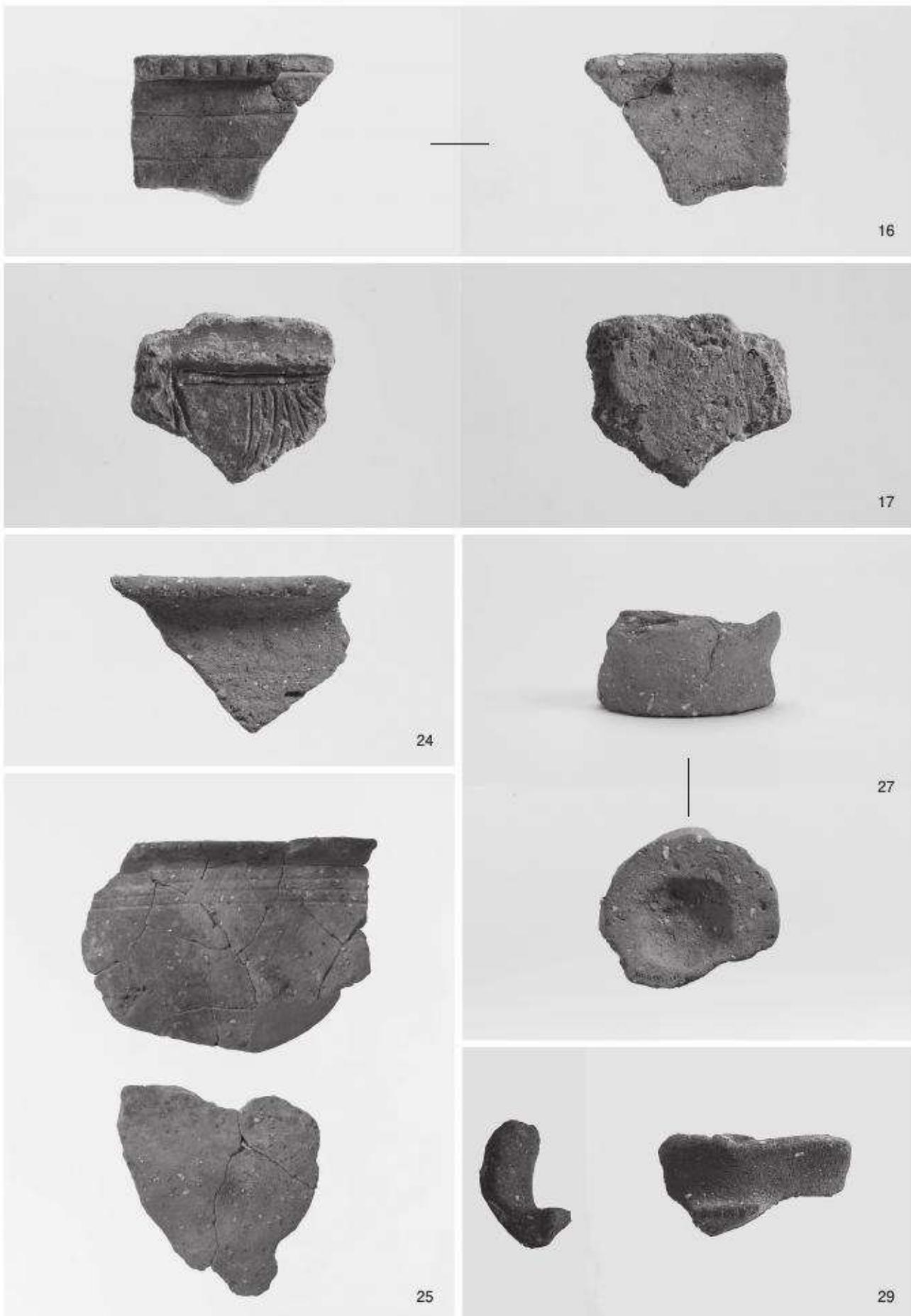
21



22

13～15・21・22：SD01 出土土器

写真図版 66 遺物



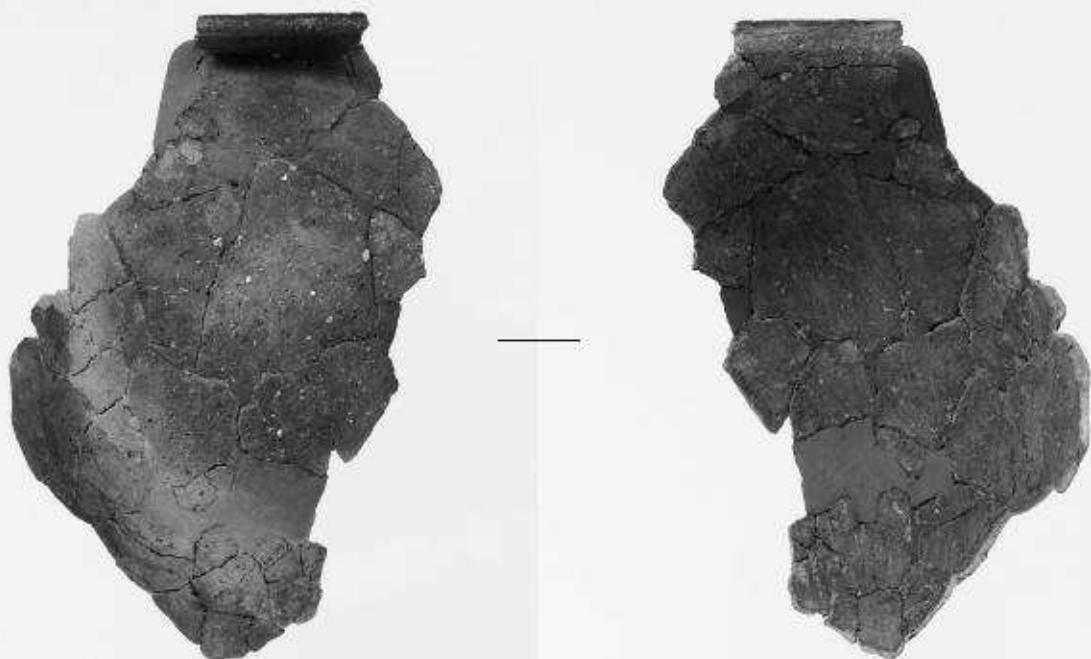
16・17：SD01 出土土器

24・25：SD03 出土土器

27：SD04 出土土器

29：SD09 出土土器

写真図版 67 遺物



28



30



31



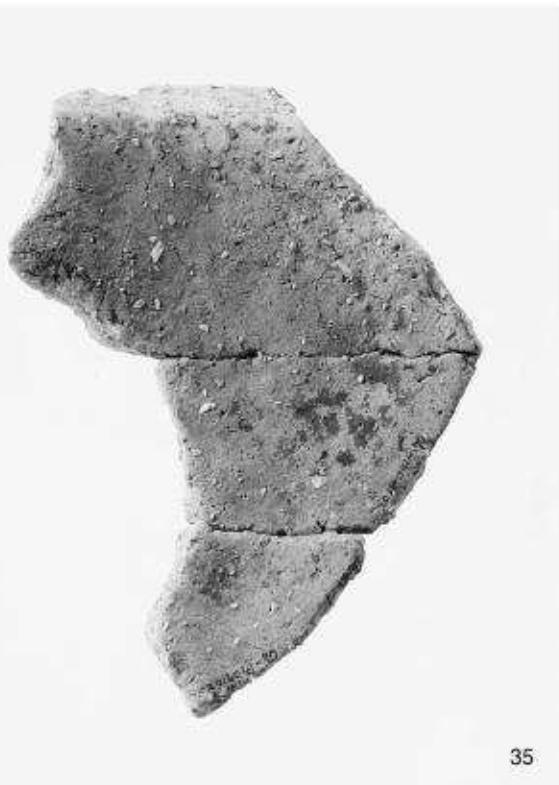
32

28 : SD05 出土土器

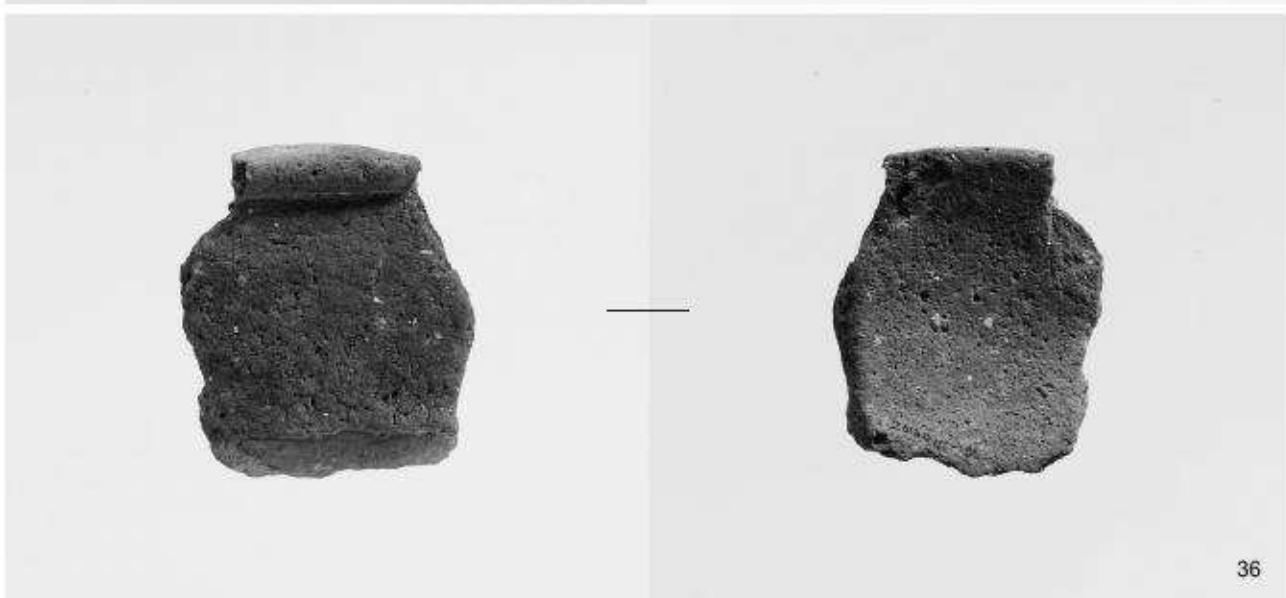
30 : SD09 出土土器

31・32 : SR01 出土土器

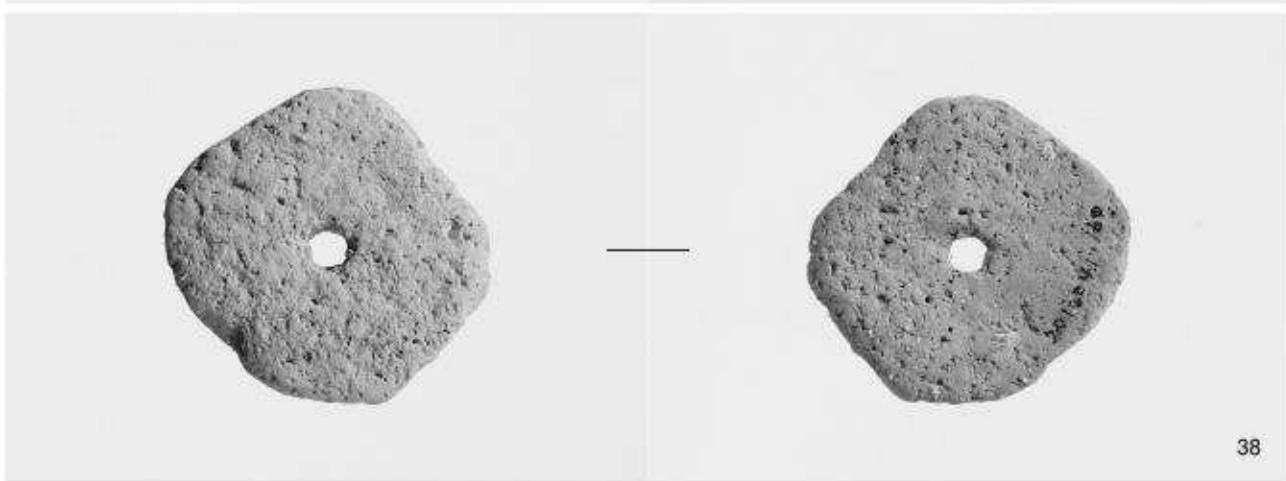
写真図版 68 遺物



35



36



38

35・36 : SR01 出土土器 38 : SR01 出土土製品

写真図版 69 遺物



41



40



43



42



46



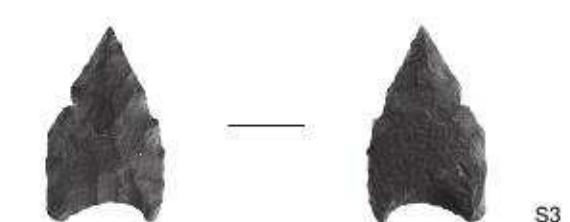
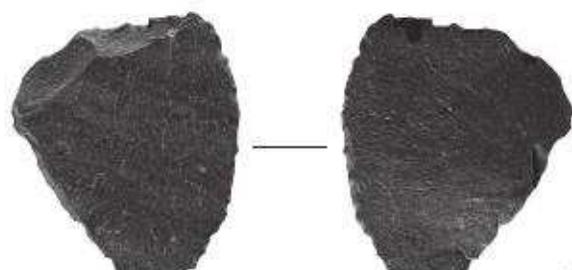
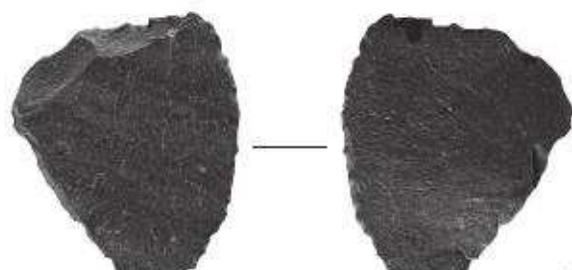
47

40 : SP09 出土土器

41 : SD07 出土土器

42 · 43 · 46 · 47 : 包含層出土土器

写真図版 70 遺物



48～50：包含層出土土器

S1・S6：SD01 出土石器

S2：SK02 出土石器

S3～S5：包含層出土石器

---

---

兵庫県文化財調査報告 第506冊

淡路市

# 大円道向遺跡

- (二) 志筑川水系志筑川 広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成31(2019)年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号

(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会

〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：株式会社 ソーエイ

〒673-0898 明石市樽屋町6番6号

---

---

